

福島区歴史研究会 会報

第十七号

2024. 2

目次

会長に就任して・・・・・・・・・・	会長 宮本隆正	2
〔追悼〕		
森本棟夫さんを偲んで・・・・・・・・	荻田善彦	2
太田晶也さんを悼む・・・・・・・・	末廣 訂	4
長山雅一さんを偲んで・・・・・・・・	多田一夫	5
「二十一人討死合戦伝承」		
成立過程の研究・・・・・・・・	藤 三郎	6
〔要約〕		
一 福島区内に残る「二十一人討死の合戦」史跡・史料		
二 「二十一人討死の合戦」伝承		
三 この出来事は何時のことか。		
四 天文元年前後の畿内の状況		
五 「二十一人討死の合戦伝承」の表と裏		
六 なぜすべての伝承に同じ誤りがあるか		
七 「二十一人討死伝承」の分類		
附 證如上人と三郎左衛門		
「鋤鋤を糧として」生きた		
江戸時代中頃の開発農民・・・・・・・・	藤 三郎	27
幻の野田城―附『野田新報』のこと―	岡倉光男	32

「野田藤発祥之地」記念碑建立	藤 三郎	35
【参考資料】藤とフジ	牧野富太郎	35
野田藤・ノダフジのだふじ	藤 三郎	36
消えた野田村の川	森畑通夫	37
「記憶の地図」アートプロジェクトに参加して	西田康江	38
兵庫津ミュージアム見学と		
周辺歴史散歩	澤田耕作	39
近世大坂の基盤づくり		
―大和川付け替えの歴史的背景		
二〇二三年第一回セミナー報告	服部静尚	40
田辺文学を生んだ〈福島〉		
―福島区制八十周年記念講演会報告―	西田康江	41
【特別寄稿】田辺文学を生んだ〈福島〉		
―福島区制八十周年記念講演会―	中 周子	42
2023年の事業		
2023年の活動記録		44



会長に就任して

会長 宮本隆正

令和五年四月より、末廣前会長のご退任のあとを受けて、会長職という重責を担うことになり、身が引き締まる思いです。私が井形事務局長のお誘いを受けてこの会に入会したのは、三〇年近く前です。その頃は現役の会社員でしたので腰掛け状態が十年以上続きました。その後、会計を約一〇年、事務局長を約五年、務めを全うし、この四月に至りました。

この福島区歴史研究会は、故宮本武、故羽間重光、故太田勝義、末廣訂の各氏が歴代会長を務められ、また、陰に日向に会の維持拡大に絶大なる貢献をされました故井形正寿事務局長のお力なくして今の会はありません。ただ、逆に一人に頼りすぎていたことによる弊害があったことも事実です。現在は、そのようなことを払拭した体制であり、各会員の意志が反映されやすい組織となっています。これを保持し、拡大するのが、これからの命題です。

現在進行中の各地区のガイドブック作成も、急がず納得いくものを完成させ、全四冊揃うのが楽しみです。また、田辺聖子生誕碑建立計画は頓挫しましたが、改めて田辺聖子文学碑建立に向けて委員会を設けて前に進めるべく体制を整えることをめざします。

最後に、各会員の今まで以上のお力添えを切にお願い申し上げ、就任の挨拶といたします。

〈追悼〉

森本棟夫さんを偲んで

荻田善彦

令和五年四月九日に我らの先輩、森本棟夫会員が突然亡くなられました。

ご冥福を願いつつ、今私の手元にある森本氏の歴史に関する著述と史料の紹介及び想い出を語ります。

【著述関係】

一、『福島区歴史研究会会報 第八号』「五百羅漢」ってどこに？

(二〇一七・二)

現福島五丁目にあった大寺「妙徳寺」の紹介記事であるが、別途に移転先の生駒山の麓、額田の訪問記録その他がある。氏はかねがね跡地に石碑建立することを願っていた。

二、『福島区歴史研究会会報 第十四号』「大阪を襲う南海地震と津波」二〇一九・セミナー報告

三、「瓦版にみる明治時代最大の水害」二〇二一・秋頃。

先の南海地震と明治一八年の淀川大洪水に関する記事の福島関係解説。A4版一三頁 その他福島に関する災害史多数有り。

四、『大川便覧』天保一〇年(一八三九)秋 古絵地図(京伏見(安治川口まで)の解説書 A4版二四頁と付記、蔵屋敷等の資料。

五、「京街道を大坂八軒屋浜から五十四次伏見宿まで」

六、「京街道・守口文祿堤を歩く」A4写真版含む約五〇頁

三〇六までは、大阪歴史博物館で「大阪を襲った大洪水」展の明治一八年淀川大洪水で福島が水没した絵図に端を発した大川を遡る歴史探訪でした。

七、「路地のお地藏さん」二〇一五 萩田と共同取材作成

福島連合地区の四地藏を紹介した冊子 A4版二二頁。

以上七項目紹介しましたが、氏より頂いた資料はまだまだ多数あります。

【地域活動での想いで】（福島地区に關しての集まり）

一、『「福島村」小さな小さな歴史まち歩き』作成に關して。

森本・大垣・萩田の三名で気楽な町歩きガイドブックを作成しようと連合町会を出版元とする承認を得て、約二年間程打ち合わせを重ねました。

いざ編集作業に入ると、氏の膨大な歴史に關する知識があふれ出て、いつまでたっても完成しないと思われる程あり、項目を福島地区に限ることと内容も簡素にと懇願すること度々にてやっと完成。二〇一八年春發行。

二、「夏祭りその他」

氏が亡くなられてはや十ヶ月季節はめぐりました。

夏祭地車講での準備に際してテントや舞台の設置や様々な飾りつけ「あれは、これは森本さんしかわからない」「尋ねる人はもういない」の多さに驚きを感じる。

氏は長年福島二丁目の町会長を務め、水防団等数々の奉仕活動に關わり、きつと他のグループでも同様でしょう。

【旅の想い出、歴史探訪二人旅】

氏との付き合いは私の定年退職後と比較的浅く、地域活動が多くなつて来た頃かですが、二度遠方へ出かけました。

一、神奈川県横須賀市へ、二〇一九・一二。

「砂村新左衛門祭に参加」

古地図（文化三年・明治九年・明治十九年）版に現北区堂島三丁目・福島区福島一丁目・五丁目に字上砂・字下砂・字真砂と記載されています。

江戸時代初期に幕府の命により新田開発に生涯を捧げた「砂村新左衛門」の名にちなんだ地名と言われています。

氏は「小さな歴史GBうんちく蘊蓄版」に詳しく紹介記事を作成の過程で江戸その他での開発の後、神奈川県横須賀市久里浜にて亡くなり、一月一五日の命日に近い土曜日に、現地で「砂村新左衛門祭」が現在も行われていること知り、参加の旅をしました。

久里浜の地元の有力者（区長や議員）約五〇名参集の厳かな供養の

行事であり、我が福島村には何の痕跡も生きた伝承もないとの思いを抱いて帰阪する。

二、北近江へ、二〇二〇・一一。

「奥琵琶湖、石仏と観音菩薩、歴史探訪の旅」一泊二日

秋の快晴、素晴らしい紅葉が映える琵琶湖を一周、温泉宿に泊、氏がドライブ行程やタイムスケジュール、見学や拝観場所・昼食会場設定にて、満足の旅となりました。

ここでも氏の歴史に関する豊富な知見、特に観音菩薩像に関する詳しくに改めて驚きました。

【まとめ】

今も私の本棚には森本氏作の冊子があり、未整理の資料も多くあります。

福島小学校で毎年開催の「ふれあい祭り」歴史研究会展示で使用するパネルボードを二人で作った事。

一見強面の氏、一二月に入れば「京の大根焚き行ってきたで」とお土産のお菓子を手にもって現れた森本さん。

私にとって強い兄貴分であり、福島村の歴史勉強では盟友でした。

ここに改めてお悔やみとお礼を申し上げます。

〈追悼〉

太田晶也さんを悼む

末廣 訂

本会会員で大阪市議会議員であった太田晶也さんが二〇二三年七月七日、五一歳という若さで急逝されたことは本当に残念という言葉しか浮かばない。

前会長であったお父さんの勝義さんの後、市議会議員に選出され、そして当会に入会していただき、これからの活躍を期待していた折だけに、ご本人も大変悔しい思いであったと思う。

たまたま長女と同じ小学校、中学校と同級生で、しかも同じ海老江であったので、あの大きな体格で海老江八坂神社の祭りや、同窓会等でも一緒に騒いだという思い出があっただけに、何とも言えない寂しい気持ちで一杯である。

また、地域活動というか、現在関西万国博覧会用に工事中の淀川左岸線高架にともなう市の新たな脇道路（市南岸線）の出入口の場所と交通規制の問題についていろいろ相談に乗ってもらっていた。

当会会員としては、日ごろご多忙のため、月例会や講演会等にはあまり顔を見る機会がなかったが、年度初めの「総会」には必ず出席して、近況報告をもらっていた。

思い出すのは、勝義会長が力を入れておられた「田辺聖子の記念碑建立」については晶也さんをお願いして二〇一八年四月、福島区役所

会議室で大阪市との交渉時に同席してもらった。この交渉会議は久しぶりであり、我々の思いがほとんど市側に通じなかったこともあり、その後、当時の連合町会長の自宅まで私とご一緒して対策等の話をしてもらったことがあった。

以後、この件についていろいろ気を使っておられたと事務所の方から耳にしており、われわれの力不足に申し訳ない気持ちで一杯である。

昨年の地方選挙で、急遽出馬を辞退され、弟の勝己さんの出発式で最後の挨拶を事務所前でされたとき、久しぶりにマイクを持った晶也さんの姿を忘れることができません。ご自分の病気との戦い、弟さんの当選への応援依頼等涙ながらに話された挨拶が、私が拝見した晶也さんの姿で今も脳裏に残っている。

どうぞ、安らかにお休みください

いろいろお世話になりお礼申し上げます。

合掌



太田さん（左）と筆者
歴史研究会の総会にて
2018年2月

〈追悼〉

長山雅一さんを偲んで

多田 一夫

本会顧問の長山雅一さんが二〇二四年一月七日にご逝去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。

長山会員と本会とのかかわりは、二〇一二年一二月に発行された『なにわ福島ものがたり―福島歴史研究会三十周年記念誌―』に寄稿された「郷土・福島区研究にことよせて」で、自ら次のように語っておられます。

「私は福島区内で生まれ育ちました。私の専攻は日本古代史と考古学なので、福島区の歴史にはあまり縁がないと言うことで、長らく研究会に所属していませんでした。さらに、市教委で大阪市の文化財を担当していたので、地元の研究会とは一線を画していました。」

大阪市を退職後、二〇一〇年より、鷺洲の妙壽寺で「浦江塾」と言う勉強会をしています。研究会の方々も参加いただいています。そこでは福島区の昔の写真や絵図なども紹介され、話しあうことがあります。このように、歴史の痕跡をたどり歴史を考えることは興味深いものです。」

ただし、歴史を考える楽しさと共に、その難しさもあるようです。「我家の戸籍謄本によると、私は昭和一六年、大阪市西淀川区浦江上一丁目で生まれました。ところが昭和一八年に西淀川区から転出し、

福島区へ転入とあつたと思います。そして、その後、浦江上一丁目が鷺洲一丁目になったと書いてあったように記憶しています。同じところに住んでいたのに、行政区の変更で人間が動いたことになっているのです。書かれた史料は貴重な歴史資料です。しかし、必ずしも事実を語っていないということが解ります。歴史を学ぶものとして資料の読み方に一層の注意が必要と感じました」。

このように、長山会員は、大阪市を退職後、大阪文化財研究所の所長や流通経済大学の教員を勤めるとともに、福島区歴史研究会にも参加され、地元地域の歴史の発掘と保存にその専門性を発揮してこられました。また、二〇一二年には、長年にわたり難波宮跡の保存と顕彰に尽力されてきたこと、「文化功労（芸術・芸能・科学又は学術に関して尽力された方）」の理由で「大阪市民表彰」を受けられています。

長山会員は、遺跡保存や歴史研究の専門家として、ご意見番的な立場、顧問として本会に参加されていました。これからも、我々の活動に対する専門的、学術的な助言や指導をお願いしたいと思っております。ただけに、大変残念です。

ご冥福をお祈りいたします。



「二十一人討死合戦伝承」

成立過程の研究

藤 三郎

【要約】

「畿内天文の一向一揆」（「一向法華の乱」）とよばれる本願寺十世證如（註①）と細川晴元（註②）との間の大規模な戦乱が勃発した直後の天文元年（一五三二）八月九日、戦線は大阪御坊（後の大阪本願寺）の證如の身に迫ってきた。證如上人の側近くで戦っていた野田福島の門徒は、上人を安全な野田にお連れした。この合戦で野田福島の門徒二十一人が討死した。野田福島の門徒は、その後「畿内天文の一向一揆」及び「中嶋の乱」で、断続的であるが足かけ5年間も戦いつづけた。

江戸時代初期の人々は、祖先が一向一揆に参戦していたことを後ろに隠し、それに代わって、「山科本願寺を焼き打ちにした六角定頼が、證如を野田まで追って来た」という「本願寺證如の法難伝承」が成立した。

ここで伝承は二つの系統に分かれた。

註① 本願寺證如（一五一六～五四）浄土真宗本願寺・第十世宗主。諱は光教。院号は信受院。法印権僧正。父は円如。本願寺第八世蓮如の曾孫。九条尚経の猶子。石山合戦で有名な第十一世顯如は長男。

註② 細川晴元（一五一四～六三）。細川京兆家十七代当主。当時畿内一円を支配していた武将。

一つは野田福島の門徒が一向一揆に参戦したことを隠し、本願寺證如を法難から助けた事を伝える「表向き」の伝承が版本として出版された（「藤伝記」）。これを元に幾つかの伝承が派生した。

もう一つは一向一揆の中の出來事であったことを示唆し、真相の一端を伝える「裏向き」の伝承が野田惣道場（後の極樂寺・圓滿寺）で語り継がれた（「圓滿寺縁起」）。後者は、広く知られることなく、江戸時代末にいたってようやく解禁されたが他の伝承に影響するとはなかった。



玉川コミュニティセンターの
二十一人討死碑

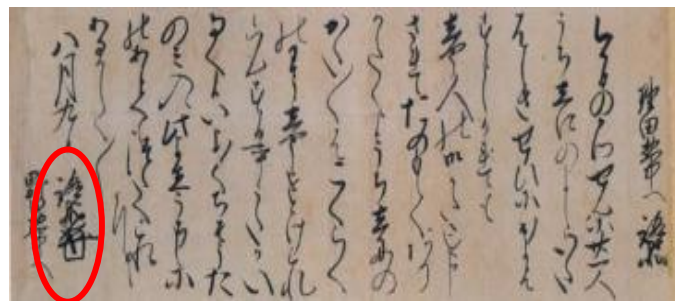


極樂寺境内の
二十一人討死墓

一 福島区内に残る「二十一人討死の合戦」史跡・史料

大阪市福島区には「二十一人討死の合戦」という伝承があり、この合戦で討死した二十一人の墓地が、極樂寺（福島区玉川四）・南徳寺墓地（吉野五）、本遇寺（福島三）にある。激戦地とされる生涯橋の碑が「下の天神社」（玉川一）に、討死した門徒の供養塔が玉川コミュニティセンター内（玉川四）にある。

この出来事を裏付ける「野田御書」と言われる本願寺第十世證如上人自筆の宗主感状が圓滿寺にあり、その写しが極樂寺・（玉川）春日神社（玉川二）に残る。戦前までは南徳寺（吉野五丁目）にもあった。



「野田御書」圓滿寺所蔵・大阪市指定文化財

野田惣中へ 證如
今日のかつせん（合戦）に 廿一人うち
しに（討死）のよし いたはしき せひ
におよはす候 しかれとも しょう人
の御かたを申され候 たのもしくあり
かたく候 うちしにの方々は にく
らくのわうしょうとけられん候 はんす
る事 うたかいなく候 いや々々
ちそうたのみいり候 此のよしうちし
にのあとへも つたえられ候 へく候
あなかしこ 々々

八月九日 證如 （花押）

野田惣中へ

先ずは、「野田御書」に関して先人の研究（文献①）を紹介する。

そもそも、討死した門徒に対し、宗主感状は書かないのが、本願寺の慣習である。なぜなら役勤仕自体は、親鸞上人への報恩感謝のための「報恩行」であり、そのものが極樂往生を

約束している。だから謝辞はあり得ないのである。戦国期百年間さまざまな一向一揆にかかわる感状が多数伝わるが、そのほとんどが偽文書や写しである。本文書とされるのはこの「野田御書」以外にはほとんど見受けられない。さすれば證如はどうしてこの感状を書いたのであろうか。石山膝下における開戦直後の劇的な戦いであり思わず自ら筆をとって書きしたためた、近侍していた家司などは蓮如以来の「伝統」は知っていたものの、證如の行為を止めることが出来なかった。この「野田御書」には写本が福井市諦聴寺、福井県丹生郡光善寺、美濃徳光村長源寺、宇都宮市観専寺、常州水戸城下馬喰、野田玄貞方等々十一通もある。通常原本が存在すれば写しは等閑視されるのが普通である。このように多数の写本が残っていると言うことは、それ自体に何らかの意味があることを強く物語っている。

戦国時代から江戸時代初めまで、野田福島はたびたび戦火に見舞われ、ほとんどの記録は失われてしまった。江戸時代初期、この宗主感状の存在と祖先の微すかな記憶から「二十一人討死の合戦伝承」が成立した。時代が下ると共にさまざまな創作が加えられ多数の伝承が派生した。それらの内容はまちまちで、この出来事を史実とするには疑問とさせる原因となっている。本報では、これら伝承の成立過程を検証した。「二十一人討死の合戦」については、既に考証しているのでそれも合わせてご一読願いたい(文献②)。

二「二十一人討死の合戦」伝承

基本的な伝承を二例紹介する。其の他の伝承については参考史料として巻末(a)にまとめて掲載する。

伝承例(1) 貞享三年(一六八六)に成立した(玉川)春日神社に伝わる「藤伝記」(註③)には「本願寺騒動」として次のように記されている。

天文二年巳八月九日、本願寺第十世證如上人、近江國六角弾正定頼不意に上人に敵対、此野田へ落来らせ、藤境内へ逃込給ひ、定頼追掛来り、村中馳集りし内、早藤境内へ火をかけ、漸上人は忍バセ、福嶋の浜より小船に乗せ、木津川さして落させ給ふ。跡ハ村中切むすび敵退せ、折からに手疵のもの数限りなく、落命のもの都合廿一人あり。迫々上人聞給ひ、いたはしく思召、小船の内にて、村中への末の世の為、御書御認下され、なを藤主へは六字の名号何れも船中にて頂戴いたし、則、木津川堤へ泉州門徒馳集り、夫より紀州鷺の森へと落延給ひける。野田門徒、猶藤主も御暇申歸りし也。よつて藤境内灰燼と成り(後略)

この「藤伝記」は、江戸時代初期に成立した後の諸伝承の原型となつたものである。江戸時代半ばに版本として出版された。原本は(玉川)春日神社に、版本は国会図書館にある。

註③ 「藤伝記」(玉川)春日神社(福島区玉川2)所蔵。貞享三年成立の

野田藤と野田村に関する伝承・和歌・歴史を集めた古文書。

伝承例(2) 嘉永三年(一八五〇)に成立した圓滿寺に伝わる「圓滿寺縁起」(抜粋)を次に示す。

天文元年證如上人十七歳の御時、江州観音寺の城主佐々木六角弾正定頼故あつて、浄土真宗を深く憎み手勢に京都日蓮党の悪僧をかたらい、山科に押し寄せ昼夜ひまなく責む。同年八月廿四日、敵勢俄かに近づき御本廟に火を掛けしかば魔風しきりにして、蓮如上人御草創以来数代御相承の霊場も邪見の為に灰燼焦土と成る。痛むべし悲しむべし。(中略) 天文二年巳八月九日、敵勢三千余騎不意におそい来つて、一参に責め立てる。今は石山勢も防ぎ難く、上人の御命も危うきにせまり給う。野田福島の御門下五百余人勢を揃え、石山へ籠城しけり。(中略) 依之、上人を怪しき姿に成し奉り、御真影は念仏の久左衛門に背をわせ、上人は藤三郎左衛門と云う剛力の若者御手を取り御門末前後を守護して、難なく野田に移し奉る。(中略) 敵軍分逆の余り野田の民家へ火を放つ。一時に焼失せり。今日の合戦卯之上刻に始まり、敵味方手負い数を知らず。別して野田の御門下廿一人、今の生害橋の地にて討死せり。此の由、船中へ言上におよびければ、(中略) 御満悦の余り御箭立を取り船中に於いて御書御染筆遊ばされ討死の跡へ下したまいけり。(後略)

嘉永三年

これは、江戸時代初期から毎年五月八日に開かれる「野田村二十一人討死證如上人御消息披露法要」で披露されている伝承で、江戸時代末期に文書化された上で木版刷りにされた。

「藤伝記」と「圓滿寺縁起」を比較すると、前者は突然六角定頼に追われて證如が野田に逃げ込んだため、激戦になり二十一人が討ち死にした。当時の人は「三郎左衛門」と判っていたはずであるが「藤主」として、実名が伏せられていることに注目していただきたい。

後者は六角定頼に襲われ山科本願寺から大阪に逃れてきた證如が、再び三千の敵に襲われ、五百の野田福島の門徒は石山に籠城した。そこも危うくなったので、御真影は念仏久左衛門が背負い、藤三郎左衛門が上人の手を取って野田にお連れした。ここでは一揆に参戦していたことを示唆している事と證如を襲ったのは六角定頼とはしていない二つの点が重要である。また三郎左衛門も登場する。

二つの伝承の間には大きな違いがあるが、当時、圓滿寺と春日神社(藤家)は緊密な関係に有り、情報を共有していたはずであるが、どうして全く異なる伝承が成立したのであるうか。これは五節で検証する。

三 この出来事は何時のことか。

福島区内に残るすべての伝承は「天文二年八月九日」としている。当時の人々は、「天文元年八月二四日に六角定頼によつて山科本願寺が焼き打ちされ、そこから證如が大阪に逃れてきた」と考えたためである。本伝承の核になっているのは、前出の圓滿寺に伝わる「野田御

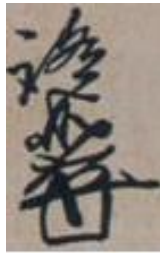
書」である。これには日付があるが年号がない。ここから後世の人々

は混乱した。證如の花押の形は享禄四年から天文二年にかけて、花押の下の部分の形が変わっている。享禄四年（一五三一）から天文元年（一五三二）は角張っていたのが天文二年（一五三三）には少し丸みを帯びる傾向がある。「證如花押の編年表」から、圓滿寺所蔵の「野田御書」は、天文元年のものと比定できる。

また天文二年六月二十日に、證如と細川晴元の間で、かりそめではあるが和議が結ばれており、天文二年八月頃は大きな合戦がなかった。この出来事は天文元年八月九日であったとして間違いない。金龍静氏も前出のようにその立場を取っておられる。



小松市
蓮寺
享禄4年



圓滿寺所蔵
野田御書
天文元年

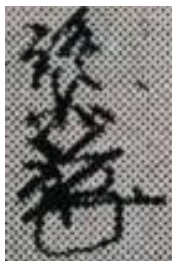


富山県城端
善徳寺
天文元年

証如花押編年表
元東本願寺寺史編纂所副所長・
金龍 静氏提供資料をもとに作成



當麻町
葛本氏
天文2年



萩市
端坊文書
天文2年

【本願寺学僧の天文三年説】

野田村門徒の中にはこの日付けに疑問を抱いた者がいたようで、本願寺に問い会わせたようである。宝永七年（一七一〇）正月二日、本願寺学僧・隠侶が、細川二流にさかのぼりかなり念入りに考証した結果、天文三年と結論つけている。しかし考証過程には事実誤認もある上に、隠侶は『私心記』を読んでいなかったため、天文元年八月四日から十日前後本願寺が連戦連敗におちいった事は知らなかった。この説は諸伝承に影響しなかった。

【本願寺坊官の天文元年説】

宝暦二年（一七五三）七月二十七日に、本願寺坊官・下間大蔵郷法橋頼□から極楽寺に證如書状（写し）が発給された。これには下付許可状が同伴しており、ここでは天文元年八月九日発給とされている（文献④）『私心記』又何らかの内部文書を根拠に、天文元年であったと判断したようである。しかし、この説も諸伝承に影響しなかった。

四 天文元年前後の畿内の状況

天文元年八月は、本願寺證如と畿内一円を支配していた細川晴元との、後に「畿内天文の一向一揆」と言われる争乱が始まったばかりであった。

本願寺十世證如は、四年前の享禄元年（一五二八）に始まる「享禄の錯乱」（大一揆・小一揆）で、先代の実如につながる加賀三力寺（若松本泉寺蓮悟、松岡寺蓮綱、山田光教寺蓮聖）を滅ぼし、更に加賀の守護富樫氏を能登に追放し、加賀一国を手中に収めていた。

一方、堺において、いわゆる「堺幕府」をおき畿内一円を支配していた細川京兆家当主・細川晴元は、享祿四年（一五三二）六月四日、「天王寺合戦」で宿敵・細川高国を倒し（摂州の大物崩れ）その地位を強固にしていた。この合戦に勝利できたのは、部下の武将・三好元長の軍事力であった。しかし將軍職を巡る意見の対立や、元長の叔父・三好政長と木澤長政の讒言により、晴元は元長を排除する動きに出た。畿内最強の武士団を率いる元長を倒すために、晴元は京都・山科本願寺の證如に來援を依頼したのである。

享祿五年（註④）（一五三三）六月五日夜、證如は急遽山科から少数の側近を伴って大坂御坊（後の大阪本願寺「石山」）に移った。

今日山科の本願寺 世に雜説あるとて 津の国の方にいぬ

（「お湯殿の上の日記」）

こうして大阪（石山）御坊に駆け付けた證如は、自ら檄を飛ばして畿内の門徒の決起を促した。結集した門徒は二万とも三万とも言われている。一揆勢は高屋城の畠山義堯（よしたか）を破り十万人に膨れ上がり、六月二十日には三好元長を堺・顕本寺で討ち取ったことは史実として有名である。しかし、戦乱はそこで収まらなかった。

◇ 七月十七日、大和国南都へ乱入して興福寺を攻め、さらに僧兵が逃げ込んだ越智氏の高取城を攻撃した。一向一揆は暴走し始めたのである。晴元はこれらの一揆を證如が後ろから操

っていると思なし、南近江の守護佐々木六角定頼や法華衆の力を借りて一向一揆殲滅に乗り出した。

◇ 八月二日、晴元は茨木長隆に奉書を発令させ、法華衆の決起を促した。

本願寺のこと 別儀なき旨申さるゝといえども 一揆などほしいまま恣なる動き 造意歴然なり しかる上は 諸宗滅亡この時たるべきか 所詮 当宗中このみぎり砌相催され 忠節をぬきんでらるればご快然たるべきの由候なり
よって執達件の如し

享祿五 八月二日

（茨木）長隆 花押

念仏寺

（「開口神社文書」）

◇ 八月四日、堺の真宗浅香道場が、木澤長政の手によって焼き討ちされた。実従は晴元に裏切られたことを、次のように書き残している。

木澤討ち出で候 六郎（細川晴元）この方に対し敵と為る

（「私心記」）

これは、以後足かけ四年間続くことになる「畿内天文の一向一揆」の事実上の開戦であった。

この日、本願寺側は和泉・河内・大和・摂津において一斉に蜂起した。

註④ 享祿五年七月二十九日天文と改元。

◇ 八月五日、一揆勢は摂津池田城を包囲した。

大坂衆明祐など 打ち死に（「私心記」）（文献④）

◇ 八月八〜九日、本願寺側は大和の一向一揆が敗北。河内の一揆も木澤勢に敗北。堺でも晴元勢に連戦連敗という惨状であった。「二十一人討死の合戦」は、このような状況下に勃発したのである。当時、京都山科本願寺にいた実従は、問題の八月九日の条に

南方に於いて合戦（東）兵衛大夫など討ち死

大阪は山科本願寺から見て南方に位置するので、実従は「南方」とは「宗主在所」を指す使い方をしている（註⑤）。この日、證如の身邊で大きな合戦があったとみていいだろう。この合戦で討死した東兵衛大夫は、證如の近習あるいは護衛の寺侍であろう。当時の本願寺の習慣として、宗主は本願寺から外に出る事はない。従ってこの合戦は大坂御坊（後の本願寺）の中又はごく近辺で戦われたはずである。

晴元配下の武将・木沢長政と法華宗の連合軍に攻められ、本願寺の塁壁が破られ敵が寺内に侵入したのかも知れない。そして證如を守っていた近習も討死した。恐らく他に数百人の門徒が討死したであろう。ただ一人となった證如が野田福島の前徒に助けられて野田村に落ち

註⑤ 「私心記」天文元年十一月十四日の条では、「南方」とは「宗主在所を指す」との注がわざわざ入っている。

のびてきた。この追撃戦のさなかに、門徒二十一人が討死した。以上は想像であるが、「圓滿寺縁起」に記されている状況に近い。

「藤伝記」のように、この合戦は野田であったとの伝承は多いが、野田のまわりは沼田で大掛かりな兵馬の移動が難しく、追撃戦の中で小競り合い程度はあったかも知れないが、大規模な合戦があったとは考えにくい。

五 「二十一人討死の合戦伝承」の表と裏

最近、江戸時代の野田村の人々が、祖先が一向一揆に関わったことを隠していた事例が二例見つかった。

事例（1） 「二十一人討死の合戦」で討死した門徒の子孫

岐阜県揖斐川町（旧北方村・旧三輪村など）に、この合戦で討死した門徒の末裔と思われる野田氏一族が多く居住している。昨秋、東京からご自分のルーツを求めて野田安平氏が、（玉川）春日神社を訪れてこられた。靖国神社の禰宜をされているが、ご先祖は明治元年に上京するまで岐阜県揖斐川町に在住していた。野田一族は九州の「藤原弘嗣の乱」（註⑥）に敗れて摂津の野田の地に移り住んだが、何時の頃か揖斐川町に移住してきたという。安倍晴明に関わる伝承も伝わる。一族には医者が多い、等々のご説明を受けた。（巻末（b）に資

註⑥ 天平十二年（七四〇）藤原弘嗣は九州の大宰府で挙兵したが、官軍によって鎮圧された。

料を掲載した)

「野田御書」の写しが全国に十一通あるが(前述)、その内の一通が、揖斐川町の南に隣接する大垣市の長源寺(浄土真宗大谷派(註⑦))にあるので、野田氏のご先祖は「二十一人討死の合戦」で討死にした門徒の子孫の可能性が高い。大阪の野田の地名を名乗って他国に移住し、今その野田姓を称している人が多く暮らしているところは他にないのではないだろうか(野田氏談)。筆者が車で揖斐川町三輪附近を走ったが、野田医院が二軒、野田サイクルが一軒目にとまった。野田一族の祖先は藤原鎌足と伝わるが、藤家の祖先も藤原藤足なる者を開祖とする藤原末流と伝わるので、恐らく祖先は同じである可能性が高い。

「大坂冬の陣」の前哨戦「(第二次)野田福島の合戦」で野田村は東軍の焼き打ちに遭いほとんど廃墟になった(文献⑤)。このため村の人口は激減し「人住まぬ野良」になったことは知られている(『蘆分船』(註⑧))。

一方、江戸時代初期には一向一揆の結束力とエネルギーはまだ残っていた。幕府はこれを、地方の新田開発に向かわせ、地方への移住を推奨した。野田氏一族のご祖先は、このような流れの中で、縁故を頼って揖斐川町に移住したのではなからうか(註⑨)。顧みれば「享禄

註⑦ 揖斐川町三輪にも長源寺があるがここにも「野田御書」の写しがあるか否かは不明。今は無住になっている。

註⑧ 『蘆分船』 延宝三年(一六七五) 一無軒道治 大阪最初の地誌。

の錯乱」において、下間頼秀・頼盛兄弟は、東海地方や美濃国の門徒を率いて、加賀に攻め入ったので、美濃国に本願寺関係の縁故があった可能性はある。

野田氏がもたらされた情報から、興味深い事がわかる。恐らく野田氏の祖先は「野田御書」の写しを手にも、自分たちは證如上人をお助けした門徒の末裔である事を、誇りを持って長源寺に伝えたであろう。しかし、一方ではこの合戦が、権力側である武家に対する本願寺の反乱であった事も認識していた。これを世間から隠すために「藤原広嗣の乱」というはるか昔の反乱にすり替えたのである。無論、その頃は、野田はまだ海面下で存在しなかった。

事例(2) 祖先が一向一揆に加わっていたことを隠蔽していた事を示す古文書

拙家に本願寺門跡への口上覚えが残っている。

付箋 此度お届け奉申上事

本願寺門跡 津村御堂留主居 渋谷左仲

宝延二年巳(一七四九)

藤之家祖先より代々名字相統故先年之頃より

名字 藤 宗左衛門

藤 三郎左衛門

註⑨ 金龍静氏は、中嶋の乱ののち、「野田御書」の写しを手にも地方へ移住したものがあったとの仮説を立てている。

此三郎左衛門義ハ地頭役人差支ヘ合戦之町筋也

右三郎左衛門義本願寺記ニ有之

圓満寺縁起では、證如上人を守って船で逃がしたという三郎左衛門（一五一一〜七三）（註⑩）は、ここでは「地頭役人差し支え合戦の町筋なり」とまるでお尋ね者扱いである。後述するように野田福島の間は「畿内天文の一向一揆」ばかりでなく、それが終結した後に勃発した「中嶋の乱」に参戦し證如から破門されている（二年半と比較的短時間で赦免された）。「中嶋の乱」は、天王寺合戦で敗死した細川高国の弟・春国と、「畿内天文の一向一揆」の敗戦の責を負わされて本願寺を追放された下間頼秀・頼盛兄弟、いわば敗者同士が結託し、本願寺と細川晴元との和議を不服として暴発した大義なき乱であった。なお中嶋とは現在の淀川下流・大川と神崎川に挟まれた大阪市北西部の広大なエリアである。

これら事例が示すように祖先が證如上人を助けた事を誇りとして

註⑩ 三郎左衛門は證如上人から野田の者又は中嶋衆とよばれていたようである。藤家累代の巻によれば「真庵 天正元年酉十一月十五日往生 此 真庵俗名者三郎左衛門 三十五年以前天文二已八月九日廿七才で證如上人様御身方申也」とされている。

天文十八年・二十年の「天文日記」に證如の供の者に藤三郎の名があるが、同一人物か否かは定かでない

いたものの、一向一揆、特に「中嶋の乱」に加わっていたことを、役人に付度したのか一族の恥と感じたのであろうか、理由はよくわからないが、注意深く隠していたのである。だから「藤伝記」には三郎左衛門の名前も出てこないし（藤主と名前を伏せている）、一揆に参加していたことを示唆する内容にもなっていない。それに対して「圓満寺縁起」では、三郎左衛門を初め野田の門徒は石山に籠城し一揆に参戦していたことを示しているが、江戸時代初期は公にしていなかった。ようやく幕末近くなってから文書として公開した。

以上のように、野田村の人々は祖先が證如上人を助けた事実は誇りとして残したい、しかしその後、二つの一揆に参戦し破門されたことは隠したい、という複雑な心理状態の元に、さまざまな創作（フィクション）が加わり「證如上人法難伝承」が成立したのではないかと考える。

六 なぜすべての伝承に同じ誤りがあるか

すべての伝承に共通した誤りは「證如上人は、天文元年八月二十四日、六角定頼と法華宗に焼き打ちにされた山科本願寺から、定頼に追われて大阪に逃れてきた」としたことにある。そうすると必然的にこの出来事は、天文二年八月九日になる。実際は「お湯殿の上の日記」のように、六月五日に大阪御坊に駆け付けたので、山科本願寺が焼き打ちされた八月二十四日には證如はそこにいなかったのだから、これは明らかに誤りである。

間違いの原因は簡単である。「六角定頼に追われて大阪に逃れてき

た」ことにしなければ、これが本願寺の「法難」であるというナラテ
イヴ（物語・語り）にならないのである。四節で述べたような、本願
寺と晴元の戦いの中での出来事であるとする軍記物になってしま
う。證如は幼少時から、好戦的な内衆の下間頼秀の影響を強く受けて
育ったので、自ら陣頭で采配を振るっていたかも知れないのである。

野田氏や拙家の祖先のように、江戸時代初期の野田村の人々は「二
十一人討死の合戦」が、長く続いた一向一揆の中の一コマであったこ
とを知っていた。しかし「藤伝記」など「表向き」の文書にはそれは
書けなかったが、圓満寺の毎年の「證如上人消息披露法要」の中で綿々
と語り継がれ、江戸時代末期に至り日の目を見たのであろう。

念のために追加すると、六角定頼がもし実際に出陣すれば、必ず何
らかの記録が残る。近江国からはるばる摂津国の南中島の南端に位置
する野田村まで密かに近づけるはずがない。定頼はその頃、山科本願
寺を法華宗と共に包囲していたことは、周知の事実である。後の出来
事になるが、定頼は「江口の合戦（註⑩）で、細川晴元の援軍に駆け
付けたが、途中妨害に遭い決戦に間に合わなかった。

註⑩ 「江口の合戦」 天文一八年（一五四九） 六月、摂津江口城（大阪

市東淀川区）における三好長慶と三好政長・細川晴元との戦い。

長慶方が勝利し、政長は敗死。晴元は近江に逃れ、その後長慶は畿内
の実権を握る。

七 二十一人討死伝承」の分類

様々な伝承があるが、幾つかのキーワードをもとに整理すると四つ
の系統に分類できる（二四ページ・表1）。

系統（A）

かなり具体的に実際の出来事に近いと思われるが、後世の創作も加
わっている（「圓満寺縁起」・「御書略縁起」）

「圓満寺縁起」は、前述のように、毎年の證如上人御消息披露法要
において読み上げられていたのを、嘉永三年文書化したと思われる。
これをもとに編纂され幕末に発行された木版刷りの「御書略縁起（圓
満寺）」も同じ系列である。これらでは證如は石山（大阪御坊）から
、野田福島の間徒に守られて逃れてきたことになっていること、又證
如を襲ったのは六角定頼とはしていない点が、他の幾つかの伝承との
大きな違いでこれは実態に近い。但し後世多くの創作が加えられた。
小船の上で「野田御書」を書いたとされているが、筆跡もしっかりし
ており、小船の上で書いた事はまずない。御真影はまだ山科本願寺に
あったので、それを担いでいたはずもない。

系統（B）

「藤伝記」を底本にしているが、曖昧で具体性に欠ける。後世の創
作も加わっている。（「藤伝記」・『摂津名所図会』）

「藤伝記」は、早い時期に成立した伝承であるが、前述の理由で真
実は隠蔽されている。「本願寺騒動」などと事実を矮小化し、一揆に参

戦したことを隠している。次に成立した『摂津名所図会』はこれを元に作られたようで、正確さに欠けるのはやむを得ない。

系統（C）

「極楽寺縁起」を底本としているが後世の創作と思われる伝承。

（「極楽寺縁起」・『摂津名所図会大成』）

六角定頼の軍勢が待ち伏せ攻撃をした（摂津名所図会大成）、福島砦を見聞しようところ、定頼が伏兵をおいて上人を包囲した（「極楽寺縁起」『摂津名所図会大成』）。野田の門徒は鋤鋤を持って戦った（『摂津名所図会大成』）などは、すべて後世の創作である。

少し考えれば判るように、待ち伏せ攻撃をするには内通者がいて、攻撃する側と緊密に連絡が取れねばならない。これはほぼあり得ない。後世の講談本の影響であろう。又戦国時代の一揆衆は槍・刀・具足程度の軽武装をしていたので、鋤鋤で戦うことはない。福島砦が出来たのは、元亀元年（一五七〇）の「野田福島の合戦」の時、この頃はなかった。

系統（D）

上記とは別の系統と思われる伝承（『明教寺史』・「南徳寺縁起」）

- ◇ 浄土真宗本願寺派・高鷲山明教寺（羽曳野市島泉二丁目二番二号）に次のような文書が残っている。

「明教寺十二代住職・慶順が、父の十一代慶勝から聞いた話として「野田村から小船で逃れた證如上人は、住吉の方へ落ち延びられ、随行していた慶勝が上人の身を案じて自坊（明教寺）にご案内し、しばし滞留の後、九月二日に御真影をもって大坂御坊に入られた」。

明教寺には、證如上人自筆の六字名号も残されている。この伝承の成立年次はわからないが、かなり古いようで、真相の一端を伝えているのではないだろうか。また野田からはるかに離れた明教寺にも「二十一人討死の合戦」伝承が伝わっていたことを示す、貴重な史料である。

◇

南徳寺については有田静原著『酔眼漫録』によると、郷土の有田勘兵衛が野田の農民を指揮して戦い討死した、「野田御書」を禅寺で書いたとされている点が他の伝承と大きな違いである。「郷土」という戦国時代になかった言葉が使われており、野田村に禅寺があったという記録もない。また野田福島に砦を築いたというがこれはあり得ない。成立年時はわからないが、比較的最近になって成立したのではないかとの印象を受ける。

以上のように、江戸時代初期に真相が隠されたため、後世の人は実際に何があったのか判らなくなったが、宗主感状「野田御書」だけは残った。その由来について人々は様々な想像を巡らした。その中心にあったのは「山科本願寺を焼き打ちにした六角定頼が證如上人を大阪まで追って来た」との「證如上人の法難」のナラティブ（物語）であった。

【追記】

『福島区史』、『玉川小学校創立百周年記念誌』、『吉野小学校創立百年誌』など郷土史は、「福島砦に來られた」、「野田村に視察に來た」、「鋤鍬を持つて戦った」など『撰津名所図会大成』の影響が大きく、『野田小学校創立百周年記念誌』は、「鷲の森」など『藤伝記』の影響が認められる。これら郷土史には、最も真相に近い「圓満寺縁起」は、使われていない。一般には公開していなかったからである。

附 證如上人と三郎左衛門

(玉川) 春日神社には、證如上人から三郎左衛門に下賜されたと思われる「方便法身の阿弥陀如来像」が残されている。在家門徒への慣例として年号は書かれていないが、木版刷りの證如花押の形は丸形に近い楕円形で天文五年から十年前後のものである。後述するように天文五年七月二十九日から天文七年十二月二十五日まで破門されていたので、発給されたのは赦免直後の天文八年〜十年に絞られる。

「蘆分船」(延宝三年・一六七五)の野田藤の条に、「藤花のかた



方便法身尊形の阿弥陀如来像 「春日神社所蔵」と證如上人の裏書き

わらに藤庵という小堂があり、そこに恵心仏の阿弥陀如来像が安置され念仏修行者がいる」との記述があるが、それがこの阿弥陀如来像と思われる(註⑫)。この者と上人のかかわりを、出来るだけ当時の史料を元に、足りないところは想像も交えて辿ってみた。



『蘆分船』野田藤

【直参門徒となつた野田衆】

記録として残る證如と三郎左衛門との面会の場合は次の一文である。

(「天文日記」(註⑬) 天文五年七月二十一日)

中嶋衆八人來たり候 この内一人野田之者なり 然る者は座敷をたて候 其の余七人之衆網所にて 上野(下間頼慶)して嶋扱いの儀申し付け候

證如は、「野田之者」には特別に座敷をたて一対一で対応している。これは直参門徒に対する通常の扱いである。中嶋衆八人が上山

註⑫ ここに描かれている念仏修行者は法名・了善(藤家八代目) 俗名・藤宗左衛門(三郎左衛門の孫)と思われる。藤庵は後の藤家の屋敷の前身。その庭は下福島公園に移設されている。

註⑬ 「天文日記」證如の日記。天文五年正月から天文二三年八月まで。當時の本願寺を取り巻く情勢を伝える第一級の史料。

しても、證如と対面するのはこの者だけであった。（證如は公式の対面の場合では、なぜか実名で呼んでいないので、以下中嶋衆を三郎左衛門と想定した）

当時の本願寺教団の慣例で、直参門徒に取り立てられるためには軍功を立てねばならない。武士は武功を立てれば、恩賞として主君から領地を与えられる。しかし本願寺の場合は与えるべき領地はない。門徒としての役務を軽減すれば教団内の格が下がる。門徒にとつての最高の榮譽は教団内での地位の向上、特に直参門徒に取り立てられる事であった。では、野田衆はどのような軍功を立てたのであろうか

「二十一討死の合戦」から約二年後の天文三年六月五日、理由はよくわからないが、晴元側の武将・三好伊賀守連盛（註⑭）・三好久介が二千の手勢を率いて本願寺に寝返ってきた。證如は、上山した兩名に野田衆・三郎左衛門を頼るよう指示したのであろう。三好伊賀守はその日の午後に野田村にやって来て陣立てし、ここに二十日間ほど滞陣した。この間に三郎左衛門は、證如の支援を受けながら、大川と古大和川に沿って点在する中嶋八ヶ村（註⑮）の門徒を糾合し、三好伊賀・久介の援軍を編成したと思われる。一揆軍は恐らく数千人に

註⑭ 三好伊賀守連盛は三好長慶の重臣。尼崎代官。のち三好家から追放され堺で牢人。八尾で親子とも討死した。（天理大学・天野忠幸教授調査）。

長い間、三好長慶の若い頃の官名と混同されていた。三好家家系図からも抹殺された謎の武将。『細川両家記』などの軍記物に登場する。

註⑮ 中嶋八力村、野田・福島・（木津）・榎並四か村・横堤。

膨らんだと思われる。

六月二十七日、三好伊賀・久介に率いられた一揆勢は、棕櫚城（豊中市）を占拠し入城した（文献⑥）。この時の軍功で野田衆が直参門徒に取り立てられたことは、順行寺実従の日記「私心記」（註⑯）（七月二十八日）の条、

御斎 野田・福島より申され候

からほぼ確かである。これは本願寺最大の行事・親鸞聖人の法要において、直参門徒として野田・福島村門徒が果たした初めての役勤仕と思われる。戦国時代・安土桃山時代・江戸時代を経て（多少形は変わったであろうが）圓満寺・極楽寺において現在まで続いているのだから驚きである（註⑰）。

【三好伊賀守・久介の援軍として戦った】

一揆勢が棕櫚城の守りを固めていたので、三好伊賀・久介は後顧の憂いなく軽兵を繰り出し、西宮・伊丹で放火合戦を繰り広げるなど晴元勢を翻弄した。十月二十日、三好伊賀率いる三好勢二千は棕櫚城を

註⑯ 「私心記」。順行寺実従の日記。天文元年八月から永禄四年十二月まで。天文元年～四年末間は、證如は日記をつけておらず、これが当時の本願寺の重要な記録。なお実従は蓮如の末子。

註⑰ 『野田藤と圓満寺文書』より「毎年一月の西本願寺最大の行事である御正忌報恩講（一月九日～十六日）において、圓満寺御頭講は一月十三日には西本願寺からの懇請によつて必ず上山し、御斎の頭人（御頭人）として筆頭席に着座し、御頭人として初夜勤行の総責を負っているのである」

出陣し、これを迎え撃つために芥川山城（高槻市）を出撃した三好政長率いる晴元軍五千と、尼崎の潮江庄付近で激突した。この時三好勢は「釣り野伏せり」という囷戦法をとった（文献⑦）。部隊を二手に分け、囷となる部隊が敵と抗戦し、負けた振りをして後退する。これを追撃して陣形が乱れた敵を、後方に隠れていた別働隊（伏兵）がこれを叩くという、戦国三好一族の得意の戦法である（文献⑧）。一揆軍はこの野伏せり（伏兵）の役割を担ったと思われる。突然の一揆勢の出現に晴元軍は総崩れとなり、数百人の戦死者を出して芥川山城に逃げ帰った。その後、三好伊賀と晴元は和解したが、これら一連の勝利によって本願寺は息を吹き返した。その直後、證如上人から野田惣道場（註⑬）に下賜されたのが圓滿寺に伝わる右下の「方便法身の阿弥陀如来像」であると思われる。天文期の阿弥陀如来像としては一回り法量が大きく、上人の野田衆に対する強い感謝の気持ちが現れている。これには年号もあり、「野田御書」や前出の三郎左衛門に下された阿弥陀如来像とは異なり公式文書と見なされる。

しかしこの勝利は一時的で明けて天文四年九月中旬、徐々に迫い詰

「註⑬ 惣道場。特定の道場があったわけではなく、当時の家の意味。「老」の下に「長（おとな）」・老夫婦・長男とその家族・次男とその家族・夫婦・下人とその家族の家父長制大家族。一家を代表して「老」が俗人のまま「坊」（毛坊主）となり名号を授与。

十家の「老」が持ち回で絵像本尊を安置した。その場合は特定の道場がないので「惣道場」とした。有力な特定の一家の座敷が道場になることもあった（金龍静氏私信）。

められた證如は、苦渋の決断で主戦派の下間頼秀・頼盛兄弟を追放した上で晴元と和議を結んだ。和議とは言っても事実上の本願寺の敗北で多額の賠償金を払った。

【「中嶋の乱」に参戦し破門された】

これで一件落着と思えたが、翌年の天文五年三月、摂州の大物崩れで敗死した細川高国の弟・晴国を大将格とし、本願寺を追放された下間頼盛・頼秀兄弟をリーダーとして「中嶋の乱」が勃発した。和睦を不服とする野田衆を筆頭とする中嶋八力村はこれに応じて参戦した。證如は三郎左衛門を本願寺に呼びつけ和議を勧めるが応じない。遂に約束を反故にして證如に待ちぼうけを食わせる始末であった。七月二八日（毎年野田福島から親鸞上人の法要で上山する日）、和睦の斡旋をした證如は木澤長政（註⑭）に対し面目を失い中嶋八か村を破門し

註⑭ 木澤長政（一四九三〜一五四二） 河内、山城南部の守護代。河内飯盛山城城主。細川晴元の被官。



方便法身尊行阿弥陀如来像
（圓滿寺蔵・大阪市指定文化財）
裏書「大谷本願寺證如 天文三年十二月二十五日摂津国西成郡中嶋野田村惣道場之物也」

た。翌七月二十九日、本願寺の庇護を失った中嶋に間髪を入れず長政を初め諸国の軍勢は猛攻を加え一気に中嶋を制圧した。この合戦で中嶋衆八百人が殺され、大将格の細川晴国は切腹、下間頼盛・頼秀兄弟は行方をくらました。後に証如の追っ手により誅殺された。

【証如から「曲者・曲事」と言われながらも赦免された】

意外にも、三郎左衛門は生き延びていた。天文七年十二月十六日、木澤長政から証如に、「中嶋衆は破門してから既に二年半になるから許してやれば」との書状が届いた（文献⑨）。恐らく長政に多額の賂を贈り証如への仲介を頼んだのであろう。

証如の反応が興味深い。最初の返答は「申し出の件は承諾しない。中嶋衆は「曲者」「言葉巧みで時には二枚舌を使う輩である」。この時、「二十一人討死の合戦」の折り、三郎左衛門の巧みな弁説に乗せられて、決して書いてはならない宗主感状を書いてしまったことなどを思い起こしたのではなからうか。ところが十二月二十五日、「中嶋衆は曲事ではあるが言っていることは尤もである」と、あつさり赦免してしまった。恐らく「野田御書」を持ち出したりして、赦免を懇願したのであろう。明けて一月八日には、早速中嶋八カ村の代表は、お礼のため打ち揃って本願寺に上山した。

証如上人は三郎左衛門には、内心用心しつつも信頼もしていたことがうかがえる。かつて三好伊賀が本願寺に寝返ってきた時、すぐさま野田に行かせたことはその証左であり、今回もわずか十日間の熟考で赦免している。破門されると許されるまで最低五年、通常十年から十

五年かかる。小一揆側の加賀の三ヶ寺は永久追放になっている。わずか二年半で許されたことは、小船の上か禅寺か定かではないが、かなり長時間共に過ごし二人の間で信頼関係を築いていたからではなからうか。無論「野田御書」の存在は大きかったに違いない。

以後、再び野田衆は直参門徒に戻ることを許され、毎年七月二十八日の親鸞聖人の法要に上山して斎の筆頭役を務めた。この頃、証如上人から三郎左衛門に下賜されたのが、前出の阿弥陀如来像と思われる。三郎左衛門は何時の頃からかわからないが出家して法名を真庵と名乗った。天正元年十一月十五日、波乱の生涯を閉じた。六十二歳。証如上人をお助けしたことはしっかり伝承及び「藤家累代の巻」に残されたが、その後一向一揆で戦い続けたこと、「中嶋の乱」に加わり破門されたことについては固く封印され子孫に伝えられることはなかった。

以上、棕橋城を攻略した一揆勢及び尼崎潮江庄で待ち伏せした農民軍が、中嶋八カ村の一揆軍であったとの前提で進めた。しかし『豊中市史』、『尼崎市史』、『細川両家記』、『私心記』などには中嶋衆と具体的な記述はない。中嶋衆が歴史上に登場するのは、『天文日記』の天文五年七月二十一日の条（前述）が初見である。

証如を野田福島の間徒が助けた事、三好伊賀・久介が野田で陣立てした事、棕橋城占拠直後に野田衆が直参門徒に取り立てられた事、尼崎潮江の合戦直後に野田惣道場に大幅の阿弥陀如来像が下賜されたこと、中嶋衆が「中嶋の乱」に参戦した史実などから、棕橋城占拠から尼崎潮江の庄の合戦に至る一連の合戦を戦った一揆衆あるいは農

民軍の主力が中嶋衆であったと考えてもよいのではないだろうか。中嶋衆の筆頭が野田村の門徒頭・三郎左衛門であり、まさに「地頭役人差し支え合戦の町筋」の二十七歳の若者であった。

考察と結論

(1) 「畿内天文の一向一揆」勃発直後の天文元年八月九日、本願寺(当時は大阪御坊)が細川晴元と法華衆連合軍の猛攻を受けた。一揆軍としてそこを守っていた野田福島門徒は、前線近くにおいて乱戦に巻き込まれた證如を助け出し、野田村に避難させた。命拾いした證如は宗主感状「野田御書」を書いた。

(2) 江戸時代初期の野田村の人々は、祖先が「中嶋の乱」を含む一向一揆に加わっていたことは知っていたが慎重に隠していた。それに代わって「山科本願寺を焼き打ちにした六角定頼が證如を大阪まで追って来た」という、本願寺證如の法難の伝承に昇華した。これは「藤伝記」の中で「本願寺騒動」として版本として出版された。ここからさまざまな伝承が派生した。

(3) すべての伝承は、野田福島の門徒が証如上人を守り二十一人が討ち死にしたことを、祖先の誇りとして伝えているが、その後「畿内天文の一向一揆」及び「中嶋の乱」に参戦したことは伝承には残されなかった。

(4) 一方、野田惣道場では、この出来事が一揆に参加していたことを示唆する形で、毎年の法要で語り継いでいたが、幕末に「圓滿寺縁起」「御書略儀」として公開されるまで一般に知られることはなかった。

た。従ってこれらは他の伝承に影響することはなかった。

(5) 野田惣道場は延宝二年(一六七二)四月二十一日、寺号を取得し極楽寺となった。享保二年(一七一七)、極楽寺(大谷派)から圓滿寺(本願寺派)に分かれたとき、原形をとどめる伝承は圓滿寺には引き継がれたが、極楽寺には残らなかった。

(6) その後『撰津名所図会』、『撰津名所図会大成』などの地誌が出版されると、その作者は次々に創作(フィクション)を加えた。

(7) 『第一西野田郷土史』、『福島区史』を初め、すべての郷土史は、これら諸伝承や江戸時代末期に成立した『撰津名所図会大成』等地誌を底本としており、史実の検証がなされたとは言い難い。

(附) 三郎左衛門が「二十一人討死の合戦」で証如上人を助けたことは、圓滿寺縁起の中で後世に伝えられた。その後本願寺のために戦い続け、直参門徒に取り立てられたが、和議成立後もそれに反対して「中嶋の乱」に参戦したため證如から破門された。子孫はそのことを一族の恥と思ったのであろうか。「合戦の町筋」とみなし子孫に伝えなかった。

おわりに

野田福島の門徒が証如上人を助け、そのために二十一人が討死をしたと言うことは、紛れもない事実である。近世にいたって本願寺教団内では「野田石山の亀鑑」と賞賛され(文献⑩)、この合戦で討死した二十一人の野田福島の門徒と十年に及ぶ石山合戦で討死した幾多の門徒が、同列で「門徒の鑑」とされていたのである。

関係寺院・神社に伝わる幾つかの伝承には、細部に於いて違いが認められるものの、この出来事をなんとかして末永く子孫に伝えたいという、強い念いと祖先に対する誇りが感じられる。これらは福島区の大切な「記憶遺産」として、今までと変わらず語り継がれるであろう。

これを史実として残すか、あるいはどのような形で残すかについては今後の課題としたい。

謝辞

本研究は野田安平氏からの揖斐川町の歴史についての史料提供と、それに対する大阪市史編纂所・尾崎安啓所長の暖かいご助言から始まりました。また福島区歴史研究会・森畑通夫会員は区内に残る関連史料を多大の努力で収集されました。これは多数の伝承や関連史料を比較検討するのに大変役に立ちました。金龍静先生は、北海道の自坊・圓滿寺に戻りましたが、NHKの大河ドラマ「どうする家康」の三河一向一揆に関する台本の監修を行われ、また『ともしび』（真宗大谷派教学研究所編。真宗大谷派宗務所発行）などの執筆活動が続けられておられます。拙稿の監修をかねて沢山の質問をしましたが、一つ一つ丁寧にお教え頂きその結果は本文の随所に反映されています。また尾崎安啓所長には、大変ご多忙の中、本稿の監修をお願いしました。これらの方々に厚く御礼申しあげます。

（史料a） 「二十一人討死の合戦」に関する伝承 （『極楽寺縁起』・

「明教寺史」は成立年時不明）

（1）『御書略縁起』（幕末頃の木版刷り）

抑、摂州西成郡野田村圓滿寺御書由来を尋るに、皇都、本願寺第十世信受院殿證如上人の御時、近江國佐々木六角弾正定頼、都日蓮宗の党をかたらい、山科の坊所へ押寄す、防戦数度二及ぶといへども終に天文元年八月廿四日邪敵火を放つ、折節魔風頻にして坊舎不残焼失す。

（中略）斯て天文二年巳八月九日敵軍大勢不意に襲来、石山を取かこむ。既に危き折柄、野田福嶋の御門下五百余人敵の後より突て入る故、敵散走す。然れ共塁壁ごとごとく破損せり。依而、尊影且上人を藤三郎左衛門其余宗徒の人々守護して野田へ遷し奉り、猶、敵兵したひ来る故、小船に召せ奉、泉州へ供奉る。御門下ふみとゞまつて防戦す、此日、数刻の合戦に数多討死す。中にも野田の御門下式十一人討死乃よしを船中にて被為聞召（後略）

（2）「極楽寺縁起」（『第一西野田郷土史』より）

天文元年八月二十四日江州観音寺城主佐々木定頼京師の日蓮宗徒と連合し、火を放つて山科本願寺を攻めた。證如上人は大阪に逃れて来られたが定頼の追究ははげしかった。そこで大阪及び附近の門徒は馳せ集つて大いに防戦した。翌二年八月九日上人は福島郡の砦を見聞しやうとして出られたが、定頼之を知つて途中に伏勢を置いた上人は取り囲まれて実に危険に陥った。本地及福島郡の門徒は之を聞いて急ぎ馳せ築り、上人に万一にも過あれば一大事、一命を捨てゝ仏恩に報いな

ければならぬ。と遮二無二敵中に突入して一方の血路を開いて、上人を通れしめんと三郎右衛門といふ者が上人の轡を取つて走らうとした。(中略) 忽ち二人の戦死者を出したが、その間に上人はやうやく虎口を逃れ(後略)

(3) 南徳寺『酔眼漫録』南徳寺十三代住職有田静昭、一九八五

江州観音寺城主佐々木弾正定頼が日蓮宗徒と聯合し、総勢四万人を以て山科本願寺を囲み、天文元年八月二十四日未明に火を放ち、灰燼に帰してしまふ。上人は難を逃れ、深草から宇治、田原の郷に落ちのびた末、蓮如上人ゆかりの大阪の地を頼つて出る。石山の御坊で門徒衆に守られてゐたのもしばらくで、やがて、佐々木定頼の徒が兵を率ゐて追跡してくる。そこで、上人は、野田、福島で砦を構へて防戦しようとするが、天文二年八月九日、野田村から福島に行かうとしたところ、途中で伏兵に囲まれてしまふ。これを知った野田村の郷士、有田勘兵衛が農民二十一人を率ゐて防戦し、殉教の血を流して討死してしまふが、上人は危く虎口を脱する事が出来たのである。野田の禅坊に帰った上人は、二十一人の戦死者を聞いて痛恨久しくし、殉教者二十一人のために一通の消息を認める。

(4) 『摂津名所図会』(寛永八年(一七九六)卷三「證如上人舊蹟」

野田村圓満寺なり。傳に云う、天文元年八月二十四日、本願寺第十代證如上人住職し給ふ山科の御堂を、江州佐々木六角弾正定頼と、日蓮宗の僧俗と一味して四方より囲み、放火して攻落し、大阪迄も追ひ来りて上人を攻討たんと戦う。此地及び近郷の門徒馳集り、身命を惜

まず防ぎけり。又天文二年八月、不意に敵攻め来りて、上人の御身も危うかりしに、野田福島の間外、命を惜まず敵を追拂ひける程に、敵味方討死手負多かりける。證如上人討死の門下を憐み、御真筆の御文章を下されける。今當村極楽寺にあり。(後略)

(5) 『摂津名所図会大成』(幕末期 曉鐘成著) 卷之十「廿一人討死

由緒地」

伝云 本願寺第十世證如上人住職たりし時江州観音寺の城主佐々木六角弾正定頼日蓮宗の僧俗をかたらひ天文元年八月廿四日不意に山科の御堂におしよせ坊舎に火をかけ攻立てければ(中略) 追来るにより是非なく福島に砦を構へ給ひ月を重て合戦止ず斯て天文二年巳八月九日上人野田より福島へ出給ふ事あるを佐々木方にハ早くも聞しり野に伏勢を置て八方より取圍む(中略) 野田福島の門徒この急難を聞とひとしく手に手に鋤鋤を以て無二無三に敵の中に討入命をおしまず戦ひつつ廿一人討死せり

(6) 『それぞれの風影 鳳凰来儀 明教寺史』(一九八六) 浄土真宗

本願寺派明教寺

天文元年八月二十四日、六角定頼に指導された法華宗によって、山科本願寺が焼き打ちされた。この時の様子を、明教寺十二代住職の慶順が、次のように記している。

「此の時證如上人御年十七歳 只今御本寺の御影堂に御座なさるる開山尊像を打敷に包まれ 御自身に御守り成して摂津の国へおもむる開山尊像を打敷に包まれ 御自身に御守り成して摂津の国へおも

表 1 「二十一人討死の合戦」に関する江戸時代に成立した寺伝・出版物の分類

出版物の分類 (南徳寺寺記は現近代史料)																	
あるが確証はない。 × 実際にはあり得ない。																	
の 状 況						野田福島の門徒	証如を守った個人名						落 ち 延 び た 先		御 書 を た し た 場 所		
不意に襲われた	伏兵が待ち伏せ	敵三千	野田衆五百人	鎧鉾で戦った	御真影		三郎左衛門	念仏久左衛門	三郎右衛門	有田勘兵衛	郷土	慶勝	鷲の森	泉州	明教寺	船中	禪坊
△	×	△	△	×	×	○	◎	△	△	△	×	△	×	×	△	×	△
			△	△		×	○	◎	△					×		×	
				△		×	○	◎						×		×	
△							○	藤主					×			×	
△							○										
	×						○		△								
	×			×			○										
	×					野田の農民				△	×						△
					×	野田の門徒						△			△		
襲われたことになっているが事実とは異なる。																	

表－１．「二十一人討死の合戦」に関する江戸時代に成立した寺伝・

○ 古文書や当時の状況から実際の出来事に近いと思われる。 △ 可能性は

江戸時代の史料				資料の公開性	合戦の場所				合 戦		
系統	出典	成立年時			石山	野田村	福島砦	生涯橋	石山に籠城	野田・福島に籠城した	如攻めた敵軍
実際にあった出来事に近いと推定される					◎	○	×	△	○	×	細川元華連合軍
A系列	かなり具体的で実際の出来事に近いと思われるが後世の創作も加わっている。	圓満寺縁起	嘉永3年 1850	低	◎	○		△	○		不詳
		圓満寺御書略縁起	幕末頃の木版刷り	高	◎	○			○		不詳
B系列	「藤伝記」を底本にしている様だが、曖昧で具体性に欠ける。後世の創作も加わっている。	藤伝記	享保8年 1686	高		○					定額
		摂津名所図会	寛永8年 1798	高		○					不詳
C系列	「極楽寺縁起」を底本としているようだが大部分後世の創作と思われる	極楽寺縁起	不明	低			×				定額
		摂津名所図会大成	安政1855	高		○	×				定額
D系列	上記とは別の系統と思われる。	南徳寺	不明								
		寺記	(新しい)			○	×			×	不詳
		それぞれの風景・鳳凰来儀明教寺史	不明 (かなり古い)			○					不詳

すべての伝承は、天文2年8月9日、山科本願寺から逃れてきた證如が、六角定頼に

むき給うに 敵追っかけきたりつて既に御尊像を理不盡にも盗らんとす野田の百姓これを囲み伏せぎ戦う。(中略) あやうく一命をとりとめた證如上人は、小船で住吉の方へのがれられた。この時、野田村の門徒が上人のために身を粉にして戦い、二十一人が討死をとげた。證如上人に常随している慶勝は、上人の身を案じ、明教寺にかくまうことを決め、證如上人を自坊へ案内した。(中略) しばしの滞留後、九月二日に證如上人は御真影をもつて石山御坊に入られた。

(史料¹b)「野田瀬古」(揖斐川町北方)

昔、北方の大場(現在の松尾の内)に藤の伊織(本名 正国)という豪族が住んでいました。父は野田大進といい、藤原鎌足の子孫で、摂州(近畿地方)の野田から美濃に来て、揖斐川三輪の西にある野田島(前島の北)に住んでいました。この場所は、大雨が降るとたびたび揖斐川が氾濫し、洪水のよく起きる場所ので、住むにはよい場所ではありませんでした。そこで北方の大場に移ってきました。

長徳元年(九九五)平安の都から、一人の美しい女性が、この里にやって来ました。そして藤の伊織の家に立ち寄りました。「都の者で深い事情があつて、親の勘当を受け、流れてきたので助けてください」とたのみました。

見るからに気品もあり、教養もありそうなので、面倒を見ることにしました。そしてしばらくする内に自分の妻とし、三人の子供が出来ました。実はこの女性は、京の都の陰陽博士である安倍晴明の妹で、名を八重と言いました。わけあつて、親にしかられ、都から出されて

しまいました。そしてたどり着いたのが北方であつたことが判りました。

やがて都では親の許しもとけたので、晴明は、八重が美濃にいることを占いて、やつとの事で、大葉の里にやつて来て、八重を連れて都へ帰ろうとしました。しかし八重は三人の子供があるからといって、兄のすすめを断りました。晴明は、あまりにも八重の固い気持ちに、つれて帰るのをあきらめました。そこで占いにより、「今の土地はよくない」とし、自分で土地を定め、四つに分けて一族の住居と決めました。この地を、後に野田の四軒屋敷と呼びました。晴明は「これより後、子孫は、良くなることや、悪くなることはあるけれど、七つの戒めを守っていれば、子孫は断絶することはない。」と言い残して、正国の三番目の子である正安を連れ、京の都へ帰っていきました。正安は加茂川の辺りに住み、加茂の阿信とよばれ長く栄えました。

野田氏は、晴明の言葉どおり繁栄しました。以来この地を、野田氏の姓をとつて、野田瀬古というようになりました。この地に、住居を定めた野田氏は、享保から文政(一七一六―一八二九)にかけて、野田李伯に代表されるように、代々医業を営みました。特に李伯は、医業のかたわらに、算術そろばんや漢字を教え、多くの弟子がありました。その弟子の一人に森前で寺子屋を開き、この辺りに大きな影響を与えた林万八がいました。瀬古とは集落をあらわしていて、野田瀬古とは野田氏一族の集落という意味です。瀬古という地名は、西南日本に多く、揖斐郡各地に見られます。(後略)

文献

- ①『一向一揆論』 金龍静 吉川弘文堂 二〇〇四
- ②「二十一人討死の合戦と一向一揆」 藤三郎
『福島区歴史研究会三十周年記念誌』所収 二〇一二
- ③『なにわのみやび野田の藤』藤三郎 東方出版 二〇〇六
- ④『石山本願寺日記』所収 一九八四
- ⑤『西成郡史』 西成郡役所編 一九一五
- ⑥『豊中市史』・「細川両家記」・「私心記」 『石山本願寺日記』所収 一九八四
- ⑦『尼崎市史』 『細川両家記』
- ⑧『戦国三好盛衰記』 出水康生 教育出版センター 一九九五
- ⑨「天文日記」 天文七年十二月十六日 『石山本願寺日記』所収 一九八四
- ⑩『同朋大学仏教研究所紀要』第二十五号 青木馨著 二〇〇五

古い写真を探しています

お手元のアルバムに

災害や今はない建物などが

写っているものがあればご提供ください

展示などに活用させていただきます。

「鋤鍬を糧として」生きた

江戸時代中頃の開発農民

藤三郎

筆者の七代前の祖先が書き残した「藤原末流子孫代々」を抜粋して紹介する。

内容を補足するため、【コラム】に京都代官・小堀数馬宛に提出した文書『名所古跡の藤』（安永八年（一七七九）亥五月）を引用した。

一 そもそも摂津の国西成郡野田村、藤の家は そのいにしえ、誠に日本にきこえし藤名所の地、藤原の家の記、国の書にあり、即ち藤原の末流子孫なり、出生より行年の事のみここに記す。

一 藤の家と申すは、開発の家高く暮すといへども、鋤鍬を元とし、井路川・荒所・不益の所を田畑といたし、村役・国の教を守り申すべきと、父の教えに候なり。

一 われ誕生は享保一五年（一七三〇）正月廿日昼さるどき出生なり、幼名を宗吉と申すなり、父には十八才の時御病死、母は河州久宝寺村安井氏なり、我れ四才の時病死したまう。

一 十二才より農作を出精、十三才にて半元服いたし、御役所へ父召され、御用向き勤めさせたくと願ひ上げ御聞き届け下され、十五才にて元服、いよいよ農業出情の上御用向きあい勤め候。

一 日向の国主の家中、すなわち当地蔵屋敷留守居の弟に、出家にて名を汲月と申し、法印様とみなみな敬いありし。われ十二才の時よ

【コラム①】 江戸時代中頃の（玉川）春日明神

◇ 名所古跡の藤

乍恐書付を以奉申上候

所持主 藤 宗左衛門

右境内

一 除地高 三石六斗九升貳合 反別 貳反八畝拾貳歩

一 本社 春日明神 相殿 辨才天女

一 末社 稻荷 八幡 四社有之候事 天神 不動

一 藤庵 一軒 有之候事

一 義詮將軍 御哥の玉川之跡と申傳へ有之候事

一 馬繫 壱ヶ所有之事

一 御免地 哥名所建札有之事

一 藤主居宅 其外建物有之事

一 祭礼毎年十一月廿一日

又神樂祭礼と申三月廿一日より同廿七日迄 七日宛の神事勤め候

但し 町奉行様より神事の間□□中 見回りこれあり候事

一 神道吉田方にて 寺社願の節 神主 宗左衛門にて 神事に

付き端々へ建札仕候事

一 水茶屋これあり

但 藤なめしてんかく（藤菜飯田楽）と申し傳へ 煮売り

売り来り候事

（注 「菜飯田楽」は、明治時代に至るまで、野田村の名物だったという。但し藤の若葉の代わり大根の葉を使っていた。広瀬忠子氏（芦屋市婦人会会長）の野田村出身の母からの伝聞）

り、十九才まで農作のまにまに法印の教えを受け申し候、法印存命のうち 法印廿四日に死すべしと仰せられしが、誠に違いなく 廿四日に死去ありしゆえ、皆々感じ入り候 右法印汲月往生、延享三年（一七三二）四月廿四日、すなわち、上福島久安寺（註①）に石碑これあり、

一 十八才の時父病死、父存命師の教へ村方別して藤の宮大切に守るべしと。三カ年の内は仏事法事を営み、村用大切にあい務め、廿六才におよび妻女を迎え、すなわち、浦江村 羽間彌左衛門娘、十五才にてお京と申すなり。

一 古来は当家壱人の庄屋、中年の頃より三人に別れありしところ、宝暦四年（一七五四） 壱人の庄屋伊兵衛 病身にて元の通りこの方 庄屋請け取り候なり

一 宝暦七年（一七五七）正月廿四日昼辰の刻、我が娘誕生、名を楚代と申すなり

一 宝暦八年（一七五八）三月廿一日より同四月廿五日まで本社修覆のため開帳いたし候なり、この時 御代官・内藤十右衛門（註②）様、藤記御糺し差し上げ奉り、御奉行様召し上げ聞きなしなされ、すなわち、この藤記代々當時にいたり御代官所へ相伝わり、此の開帳の間、御城代・井上河内守（註③）様御参詣、甚だ賑わしき御事候也

註① 福島公園（福島五丁目）にあった寺院。今はない。

註② 大坂鈴木町代官、在位、宝暦七年～明和七年（一七五七～七〇）

註③ 大坂城代、在位、宝暦六年～八年

【コラム② 城代・奉行・代官の藤見物】

◇ 藤花盛りの季節には、花を荒らさないよう役所から小者を派遣していた。

「藤の花 折り取りまじく様 境内藤等荒し申さぬよう 藤盛の節は 御役所より小者を使わし候様 申し出し候の節は小者下し置かれ候事」

◇ 城代や奉行が藤遊覧に訪れた際は、次のような対応をしていた。

「前々より御城代様并所々 御奉行所より 藤御覧有候事

但 御案内の節ならびに翌日御禮にまかり出で候節 名所、藤主・藤 宗左衛門と書きつけ、上下に脇差をおび、罷り出で候、なお又 宗左衛門勝手につき前々より 村庄屋役あい務め申し候 右由緒より御奉行様 御代官様、御廻村の節、脇差をおび御案内申し上げ候 御役所様の罷り出で候節も、同様に帯び相い勤め来り申し候事」

「右古来より御座候名所藤 元弘建武の頃（間違ひ。公経は鎌倉時代初期の貴族）当所 西園寺太政大臣公経公の御所領にて 吹田に別業有之時 行幸有之と申し伝え將軍義詮公 貞治三辰年四月御入 難波記の通り 秀吉公御入の節 曾呂利の筆有之 此外由緒古跡藤地楼閣 社殿も有之所 天文二年（二五三三） 證如上人合戦の節 又寛文二年（二六六二）寅年 出火の節焼失 破却致し右の通古跡のみ相い 残り代々私所持仕候」

一 宝暦九年（一七五九）正月廿一日より、御社再建の願い、同二月十六日見分願い相済むなり

一 宝暦九年七月、京都吉田家へ参り藤の宮ならびに、官名・装束等あい改め候事

一 宝暦十三年（一七六三）、御社普請でき、同三月廿一日より同廿七日まで、正遷宮相い済み候なり

一 宝暦十三年、船津橋筋道 村のために世話いたし、永々の道あい立て候事

一 明和四年（一七六七）、新川出来に付き 我等新田の内川に相成り

一 安永三年（一七七四）、また庄屋五右衛門、身上立ち行き申さず、元の通りこの方庄屋に相いなり、いよいよ此年より古来の通り庄屋壱人に相い成り、我等相い勤めきたり候事

一 天明四年（一七八四）三月十九日御城代戸田因幡守様御入（註④）なしくださせられ候事

一 天明七年（一七八七）十一月青木（楠五郎）一件に付き 江戸表へ召し出され、そのほう御陳屋続き、年来の庄屋役一統呼び寄せ候ては、村々難儀に付き惣代にて呼び寄せ、青木借金の事存知おり候分申すべしと仰せられ御尋ねの通り申し上げ、其ま相い済み江戸十二月出立、伊勢にて年越し目出度く正月六日帰国いたし候事

〔註④〕 大坂城代在位、天明二年（一七八二）（八四）

一
天明九年（一七八九）六月十四日、江戸御巡見（註⑤）備後守様ならびに遠藤兵左衛門殿、三宅楨十郎殿、藤御巡見 書物等御覽相い済み候事

【解説】 事件の背景

天明七年（一七八七）から老中・松平定信は「寛政の改革」を進めており、前任者の田沼意次の賄賂政治を徹底的に糾弾し始めていた。真つ先にそのやり玉に挙げられたのが、直参旗本・青木楠五郎であった。きっかけは天明六（一七八六）年、田沼意次の家老井上伊織が四国の金比羅参りの途中、摩耶山と布引の滝に立ち寄り、兵庫津に投宿した時、楠五郎の手代は井上伊織の一行を盛大にもてなした（『新修神戸市史』）。

それ以前から楠五郎は、意次に取り入り莫大な私財を蓄えており、定信から「親意次派」と見なされていた。定信は、楠五郎の罪状を暴くため、次の事件を利用した。

天明三年（一七八三）十二月八日、北河内茨田郡の代官青木楠五郎が、茨田郡下で収穫した年貢米七一八石余を江戸へ船で回送するさい、船が難破して八丈島に漂着した。積んでいた米は当時の掟により島民に払い下げられてしまった。楠五郎はこの積荷の年貢米の弁済のため、野田村を初め近隣の村々から多額の借金をし、補い切れなくなっていたのである。

楠五郎には次のような処分が下された。「貢金をしばしば私用に使い、これを償うため村々より用金を出させあるいは租税を先納させたりしたが、ついに借金が多くなった。在職二十年におよびすべて仕事を配下のものにまかせ、その会計をわきまえずかかる始末に及ぶこと未熟の至り」と厳しくとがめられ、天明八年六月四日八丈島に遠流された。（『大人名辞典』）

宗左衛門は、江戸表に呼び出された背景や、またその後の楠五郎に下った処分についてはなにも知らされていなかったと思われる。

【異説】 次のような別の説もある。

「天明の大飢饉」がすでに四年目を迎えた天明七年、枚方宿で搗屋（つきや）が村民たちに襲われ打ち壊しに遭うと云う事件が起こった。搗屋とは精米所のことである。代官青木楠五郎は、首謀者を捕らえ代官所の牢に全員ぶち込んだ。

ところが、代官所で取り調べを行っているうちに、彼らは次々に病死してゆき、遂に十数人が一人残らず死んでしまった。このために代官青木楠五郎は「全員牢死させるとは不手際なり」と大阪奉行所から叱責を受け、代官を罷免され、ついで遠島の刑を申し渡された。

（北河内地域文化誌『まんだ』七一号所収「茨田郡代官八丈流人の事」）

定信は、楠五郎を厳罰に処するため、幾つかの罪をかぶせた。いわゆる「政治裁判」であったと思われる。

註⑤ 松平定信が民情視察のため派遣した巡検使。

一 年来の願、寛政四年（一七九二） 相い済み候事は、十八ヶ村 惡水落兼ね難儀に付き、我等出精にて當時の通り、惡水落しよろしく相い成り候事 数々書面（註⑥）にこれ有り

一 寛政五年（一七九三）、円満寺普請願 我等甚だ心労にて 首尾よく相い済み候事

一 古来より勤め来たり候 藤の宮大神樂、例年三月廿一日より同廿七日迄 相い勧め候事、御奉行所、御断り済み来たり ありがたき事候

一 実子娘老人これ有り、息災に養子迎え、寛政七年（一七九五）九月十七日、朝卯の刻、孫娘出生、名を宗枝（註⑦）と申なり、養子の事は、余が母河州久宝寺村より縁付にて来たりたまひ、其隣村にて六反村の内は、存知おり申す所にて、この善右衛門の倅、めでたく村庄屋なかだちにて申し来たり候

最早七十歳になりぬれば 人限りもあるものなれば、当年七十歳の賀として祝しておく也

註⑥ 次の出来事をさしている可能性が高い。『鷺洲町史』五五九頁

「寛政三年（十月）拝借銀によりて 野田村立ち会い大樋の尻より南へ、逆川の東に添ひ、芦分橋より安治川に通ずる惡水井路の工事に關しても、旧記に詳かなれば 頗を厭わず之を掲ぐることに左の如し

乍レ恐奉_三願上_二候 撰州西成郡南中島村十七ヶ村」（以下本文省略）

註⑦ 宗枝は、成人してのち、大和川付け替えの義人・中甚兵衛より四代目にあたる今米村庄屋・中九兵衛（重正）子息を婿養子（官名・藤原義孝）に迎えた。

俗名 藤宗左衛門

官名 藤原和泉守延敏

寛政十一（一七九九）年孟春吉辰 七拾歳賀認之

子孫代々へ

一 養子といへども 日本は神の子孫にて□□養子に参り候とも天の恵みによりて相続に参り候へども 実子より厚くおもひ正直實儀をもつて 藤の家教えの通りにて 相続いたし前書の通り 大切に相続有るべし

一 この藤の家は何事も實義正直をもつて元として 惡き災難なきよう 家内安穩 子孫繁昌御守り下され候へと 御禮申し佛前にては 未来御堂春けきと御礼申すべく候

『都会にフジを咲かせましょう』出版

会報十一号で紹介された『フジ―総合ガイド―』が、タイトルを変えて、少し遅れて出版されました。

カラー写真が多く、楽しめる内容です。

本書はベル図書（主な図書館に優先的に配本される本）、学校図書（高校生、専門校生向け）に選定されました。



藤三郎著

文一総合出版

二〇二三

幻の野田城―附『野田新報』のこと―

岡倉光男

『野田新報 第7号』（一九七三年一月発行）所収の再掲

（句読点の追加など一部改変している）

郷土故事 幻の野田城―その由来と戦歴―

今年八月下旬、NHKの大河テレビドラマ『国盗り物語』の中で、織田信長勢と紀州雑賀孫市ひきいる本願寺勢との戦いが摂津中島の野田城を中心にしてあったことを、ご覧になった方は覚えておられることと思います。今日、地元でもほとんど知られていない野田城の由来をご紹介し、昔、野田で戦い、ここで生死をわかったものの、野心、欲望、運命の臭いに思いをめぐらしてみようと思います。

“いつ頃、誰が築いたか”

永禄十一年（一五六八）岐阜より上洛した織田信長は、続いて摂津河内を攻め、三好氏他を降す。一時阿波に逃れた三好氏は、事実上の管領地であった京畿を取り戻すため、その足だまりとなる要害の地を探していたが、摂津の国、野田福島に目を付ける。ここは西は大海で四国・淡州に船便あり、南北東は川にて囲まれ、又里の廻りは沼田で、まことに近国無双の勝地で、防戦の要害ここに増したる所なく、これによって公方ならびに信長勢を引き出して合戦しようと、元亀元年（一五七〇）三好三人衆及び三好笑岩等は、紀州の雑賀衆、讃州の十

河衆を加えてその数一万三千、大挙して和泉灘に上陸、同年七月二十七日野田福島にたてこもった。

“城はどのような規模であつたか”

城が築かれた元亀元年より三十七年前の天文二年、当時石山本願寺（今の大阪城の地）にあった證如上人は、次善の要地として野田に注目、その視察の途中敵に襲われ、野田の信徒二十一人が討死するという事件が起っている。当時、野田は海浜に近い漁村であつたが、三好三人衆以下の軍勢が上陸すると、すぐ堀をつくり、壁をめぐらせ、矢倉をあげ、川の浅い所には乱杭、逆茂木、大綱引いて要害となし、たてこもるその大きき五十間余（約百米）とも五町（約五五〇米）四方とも伝えられるが、詳かでない。又この種の砦ともいえる城について、現在一枚の絵も伝わっておらず、どのような外観をしていたのか不明である。

“どんな戦があつたか”

野田城を中心とした大きな戦さは二度あり、以下織田軍記によると―三好勢摂津に入るとの報せに、信長は軍勢三万余を引きつれ、元亀元年八月、岐阜を出立、六日後には天王寺に着陣す、近隣の部将、或は心替りて降参するものあり、総勢六万余、石山本願寺の押えを置くとともに野田福島を取り囲む、九月九日、各陣より人夫を出し、埋草を運んで野田福島の堀を埋める、同十一日より攻撃をかけ、日日敵味方の鉄砲の音、天地に響き、一時城方危くこらえ難くなる、これをみて本願寺派の各檀家早鐘を突けば、宗徒一揆を起し合戦を企つ、人数

意外に多く、織田方たじろく、十三日朝より西風吹き上げ、淀川逆巻くをみた三好方、河端の堤を切つて寄手の方へ押落す、これによつて寄手難儀す、大阪方より和睦の扱いあるも信長承知せず、本願寺派必死になつて五、六千人かたまり、城より打つて出て三千挺の鉄砲をかけ、雨のふる如く撃つ激戦となり、織田方部将倒れるものあり、城方勢を得て新手をくり出し撃つてかかれ、織田方退却し、敵味方引取り物わかれとなる。

それより四十四年後の大阪冬の陣では、大阪方は野田に五十間余の壕をほり、櫓を築いて支城を設け、宮島兼与他二千五百人をもつてこれを守る。慶長十一年十一月、関東水軍、伝法に着き、大阪方秀頼の座船を奪う、続いて新家にて戦あり、野田城より大野道犬出陣して戦うも利あらず、城に引きこもる。その後小衝突あり、一時、後藤又兵衛も応援にかけついたり、真田幸村が、徳川家康野田福島を巡察するとの情報によつて待ち伏せするも果さず。十一月二十九日に至つて、東軍九鬼守隆他、福島に迫り野田城を陥れ、大阪方止むなく天満に逃れる。

“城のあつた場所はどこか”

大正二年発行の大阪市史では“地理の変遷いちじるしく城址を明らかにすること難しいが、以前野田村には弓場町・北ノ町あり北ノ町を通称城之内といいその西南に馬洗渕と称する溝池あり城址はこれらを包含するものか”と記されている。

今明治十九年発行の大阪で最初の実測図を見ると、北ノ町のすぐ北

に字城之内町があり、その場所は今の玉川三丁目の協和銀行裏手の元極楽橋の碑のある処より南側一帯をさし、弓場町は恵美須神社より戎公設市場にかけての附近であり、又馬洗渕は野田小学校のすぐ東側で、東西四十米、南北九十米程の大きな池である。この池には天正十年（一五八二）豊臣秀吉が山崎で明智光秀を破る途中立寄つて命名した、という話も伝わっているが、各地の城址には馬洗池或は弓場の名が多く残っている処から、野田城址がこのあたりを含んでいたことが肯定出来る。ただ城の大きさについては、最初三好衆が築城し、あと細川氏綱が在城したといわれる野田城は、野田・玉川地区の大部分を含み、大阪冬の陣における野田城は、五十余間の記述をとつて、同地内で一部を利用して構えたと考えの方が納得しやすい。又、安永七年発行の“浪花のながめ”では、“野田村野中に楠の大木あり、所伝に昔、野田の古城の跡ならん”、この記あり、今当時の地図にて調べると、この大楠は大野町一丁目の東北隅にあたる。この説をとればレンガ筋（馬場筋）が川であつた当時、この川を利用して一方の堀にしたことが考えられる。

大阪冬の陣以後、城がどうなつたか、家康の一国一城令によつてこわされたと思われるが、今のところなにも解っていない。（岡倉記）

今（二〇二四年二月）から約半世紀前、野田に「誠友会」と名乗る団体があつた。

メンバーは、初め三一人、三〇〜四〇才台の青壮年男子で、町会の何らかの世話役やPTAの役員をしている人が多く、毎月一回集っていた。

会が終ったあとお酒の飲み会になることが多く、主旨として当時の青年会とご年配の世話人達を取りつなぐとて、意気盛んな方達の寄り合いだった。

場所は今の浪花屋菓子舗（野田二丁目）のすぐ近くにあったお寺の
 広間を利用することが殆どだった。

代表者は西川嘉則氏（洋服業）で、私（岡倉）の発案で地域新聞を発行・配布した。『野田新報』と名付け、五〇〇〇部、タブロイド版四頁で、昭和四三（一九六八）年二月に創刊。トップ記事は、第十回福島区民体育会が下福島公園グラウンドで行われたのを取材、野田地域連合が優勝したのを紹介した。他には種々のニュースや些細な事柄まで記事にした。社会問題や文化現象まで、今読み返しても、ブロック（野田地区）の歴史記録として値するかなと思われる。長年市会議員として活躍なさった故太田勝義氏も編集責任者として健筆を奮われたが、昭和五〇（一九七五）年十一月、第八号で廃刊した。

「幻の野田城」はその記事の一つで、好評を得て、元大阪城天守閣館長・渡辺武氏や藤三郎会員なども、著作でこの著述に言及された。

第 7 号

第 7 号

野田新報

発行所
野田誠友会
代表者 西川 嘉則
福島区大野町2-20
電話 461-5844
編集責任者 太田 勝義

鄉土故事

幻の野田城

—その由来と戦歴—

「買物で利はどうか」
「緑と広域緑はどうか」
「医療施設はどうか」
「地域の人間関係は如何」
「交通に対する安全」
「文化センターは有るか」
少なからず以上の条件が揃わなければ環境の良い地域とは言えないだろう。
われわれの地域はどうだろうか。一つ一つを分析して

に思ふべきに代替地として理めゆき、大きな土地を確保でき、大々という方法も一考を要するのではないか。無難な事だと一笑にふして、民間野田の地に広場も緑も出ないだろう。われわれ野田の地に緑と広場を確保するためにさきさきやかが多めたい」と思ふ。

今年八月、旬 NHKの大河テレビドラマ「國盗り物語」の中で織田信長と紀伊徳川義賢公との本願寺勢との戦いが摂津中島の野田城を心にしてあったことをご覧になった方は覚えておられるかと思いますが、今日、地元でもほとんど知られていない野田城の由來等を紹介し、野田で戦い、ここで生れた者、わたったもの、野心、欲望、運命の炎に想いをめぐらしてみたいと思います。

いづつ明、誰が築いたか？
 永禄十一年（一五六八）
 彼はより上りした織田信長の十萬衆を加えてその数一

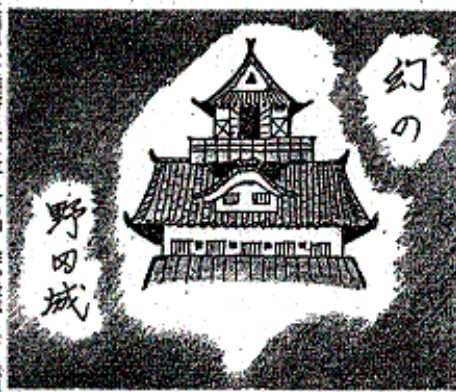
は親しい摂津河内を攻め、三好氏を降参し、一時河波に逃れた三好氏は、事實上の管領であった京極の取り戻すため、その足だまりとなる要の地を探していたが、摂津の國、野田城を巨目とする、この巨眼は大海で國一津州に船便あり、南北北は川にて囲まれ又風の便は沼田までこととに近距離の勝地だ防戦の要否に増したる所なくこれにて公方ならびに信長勢を引き出して合戦しようとする元亀元年（一五七〇）三好三入衆及び三好義興等、紀伊の徳川義賢、讃州

大綱にして、要否となし立こもるの大きき五・五十間（約百尺）とも五町（約五百〇〇米）四方とも伝えられるが詳でない。又この種の石は、牧の鞍にも伝わっており、その上のような外観をしてゐたか不明である。

野田寺を中心とした大きな城砦は、匣あり以下織田軍に占ると三・三勢勢無律に入るととの報せに信長は、軍勢三万余を引きつゝ元龜元年八月岐阜を出兵六日後には天王寺に着陣す近隣の郡村民心替りて降参するものあり総勢六万余と

方相即ち敵となり織田勢を得て新土より出し出射つてから織田方退却し、敵味方引取り物わかれとなる。

それより四十四年後の大坂冬の陣に大阪方は野田に五十間余の塙を張り伸を築いて鉢形を設け官馬場を他二千五百間とこれを守る。慶長十一年十一月開水原、佐法に善き大阪方秀頼部伍は群島踞りて新家に戦ひあらず野田城より大野田に出陣して戦ふも利あらずに引きこもるものと後小栗政宗が一時、後藤又兵衛も援にかけたりと真田村が徳川家康野田堀



「野田藤発祥之地」 記念碑建立

藤 三郎

日本の植物分類学の草分け・牧野富太郎博士は、明治四四（一九一一年）年、日本のフジの標準和名をノダフジ（ツルは右巻）と命名しました。大正七（一九一八）年と昭和一〇年頃の二度にわたり、調査のため春日神社を訪れています。右上は二度目の訪問時に撮られた写真です。記念碑は、この写真に写っているのと正確に同じ場所です。従って、ここは「野田藤の（名前の）発祥地」です。

二〇二四年七月に新五千円札が発行され、その裏面にノダフジがデザインされるのを機会に、ここに記念碑を建立し、この事績を後世に伝えることにしました。

揮毫は海老江在住の筒渕公裕氏（日本書芸院評議員）、石碑のデザインは渡辺創太氏（渡辺石整舎社長）によるものです。台座は白御影石、本体は万成石、右側のブルーパールの石積みは長い歴史の積み重ねを、上部の横長に湾曲した部分はノダフジが日本中に広がっている様子をイメージしたものです。



牧野富太郎博士
（昭和10年頃）



除幕式（2024年1月28日）



春日神社（玉川2-2） 南のマンション角
藤棚がそばにある

【参考資料】 藤とフジ 牧野富太郎

世間一般に昔から藤をフジとしているが、しかし千年あまりも昔に出来た我国で一番古い辞書の『新撰字鏡』（僧昌住の著）にはまだこれをフジとはしていなくて、それを藟（れい）としてある。これは中国の書物の『説文』に従ったものであろう。藟（音ルイ）とはツルすなわちカヅラのことで、それは藤の

野田藤・ノダフジのだふじ

藤 三郎

字の本義である。したがって藤はカヅラである。『玉篇』には「藟ハ藤也」とあり、また「藤ハ藟也、今草ニ莖シテ藟ノ如キ者ヲ惣テ呼ブ」とある。また『大広益会玉篇』にも同じく「藟ハ藤也」とあり、また「藤ハ艸木ニ蔓生スル者ノ惣名ナリ」ともある。また右の『大広益会玉篇』の和刻本（日本での刻本）には藟の字のところに「藟ハ藤也」とある右側にフジカヅラ、左側にクヅフデの訓が施してある。これは多分今いうフジのカヅラ、クズ（葛）のカヅラの意でつけたものと想像して可とも思われる。

本来藤はカヅラ、すなわちツルのことであるから、今日花を賞するあのフジは藤の一字を用いたのではそのフジすなわち *Wisteria* (*wistaria*) のフジにはならない。紫藤と書いて藤の上に紫の形容詞を加えてはじめてフジになるのだが、じつはこの紫藤は中国産であるシナフジ (*wistaria sinensis* Sweet) の名で、今それを日本産のフジに適用することは出来ない。日本にはフジが二種あって、一つはノダフジ (*wistaria floribunda*, DC)、一つはヤマフジ (*wistaria brachybotrys* Sieb. et Zucc) だ。この二つの品の総称がフジである。そしてこの二種は日本の特産で中国にはないから、したがって中国の名すなわち漢名はない。ゆえに日本のフジを紫藤と書くのは間違っていることを承知していなければならない。

『植物一日一題』（博品社 一九九八）より

牧野富太郎博士（一八八一〜一九五七）は、一九四六年八月一七日から一日一題の文章を稿し、百になったところを『随筆植物一日一題』として、一九五三年、東洋書館から出版された。底本にしたものの他、「ちくま学芸文庫」でも出版されている、

【野田藤】江戸時代の人は「野田藤」と書いて「野田の藤」と読んでいました。従って漢字表示の野田藤は歴史的な呼び方です。江戸時代初期の野田村の人々は、フジを接ぎ木苗（鉢植えのフジ）で増殖する技術を見だし「野田藤」というブランドで全国販売を始めたようです。フジは実生（種）から育てると咲くまでに一〇年以上かかります。接ぎ木苗は二〜三年で咲きますので、この技術は革新的だったのです。すべての野田藤は摂津の野田から来たと信じられていた時代もありました。

花名所としての「野田の藤」は、延宝三年（一六七五）出版の地誌『蘆分船』に「吉野の桜に野田の藤 高雄の紅葉などと、熊野の海女、犬打つ童までも唱歌しける名所」が最初です。品種としての「野田藤」の初見は、元禄八年（一六九五）に発行された日本最初の園芸書『花壇地錦抄』に「野田藤・野ふじ・ひめふじ」野田藤の説明は「むらさきの花長く下がること4尺ばかり」。

【ノダフジ】カタカナ表示の「ノダフジ」は、明治四四年（一九一〇）植物学者・牧野富太郎博士による日本の固有種のフジの標準和名です。当時関東の植木職人はフジを「野田藤」とよんでいましたので、総称としてのフジと、ツルが右巻のフジ（普通のフジ）を区別するため、後者をノダフジと命名したのです。通説のように「野田の藤」が、優良種だったとか特別に美しかったわけでも、野田が発祥地だからで

はありません。なお同博士はツルが左巻きのフジは「ヤマフジ」または「ノフジ」と名付けました。ノダフジは北海道・沖縄をのぞく全国で自生していますが、ヤマフジは西日本と東海地方にしか自生していません。しかし江戸時代は花戸で栽培しているフジを野田藤、山野に自生しているフジを山藤（又は野藤）とよんでいました。関東地方のフジは全部ノダフジですが、それが普通のフジだとバレるとブランド価値が落ちたからでしょう。



ノダフジ
『原色牧野植物図鑑』

【のだふじ】平仮名表示の「のだふじ」は、大阪市が決めた福島区独特の用語です。平成二年（一九九〇）鶴見緑地公園での「花の万博」開催を契機に、大阪市は市内を花一杯にしようとの運動を始めました。それに伴い各区は「区の花」を選定することになりました。福島区には全国に誇れる歴史的な花・野田藤があるにもかかわらず、選ばれた花は「ビンカ（日々草）・マリングールド・バラ」の三つでした。フジは垂れ下がるから縁起が悪い、この三種の花は安いから、との理由だったそうです。戦災で壊滅した野田藤の復興に取り組んでいた大阪福島ライオンズクラブのメンバーは、大変困惑しましたが、巻き返しを図り、ついに平成七年「区の花」を「のだふじ」に変更するのに成功しました。

『のだふじ 第十三号』のだふじの会 二〇二四 より転載

消えた野田村の川

森畑通夫

【聖天川】

野田村には多くの無名の水路がありましたが、大正年間までにその多くが姿を消し、最後まで残っていたのが聖天川（平均川幅一二m）でした。浦江の聖天さん附近から中津川の末流六軒家川まで流れていました。この川筋は、江戸時代に周辺村々（注1）の土地改良と水利の爲に掘られた人工の排水路「南中島悪水落水道」でしたが、この川筋を今の鷺洲あたりの人は「聖天川」と呼び、野田村の人は「野田川」と呼んだようです。昭和一〇年頃から埋め立てられて暗渠になり、新橋・成円橋・茶園橋などの橋が姿を消しました。今は「北港通」となり、福島区役所・消防署・警察署や高層マンションが建ち並ぶ、福島区の「へそ」となりました。

（注1）中津川と旧淀川筋（大川・堂島川・安治川）の間にあった南中島一八ヶ村

（注2）浦江の聖天さん（了徳院・鷺洲二丁目）から更に北へ続く聖天川の川筋が、現在の福島区と北区の境界になっている。

【玉川】

江戸時代の地図には、聖天川から現在の玉川四丁目付近、玉川南公園・玉川春日神社北側を経て、中之天神付近で堂島川に流れ込む川筋に「野田玉川」と書かれています。その昔、室町二代將軍足利義詮が、玉川春日神社にあった池の形を玉川となぞらえて詠んだといわれる和歌「いにしへのゆかりを今も紫の藤浪かかる野田の玉川」の故事に

ちなんで名づけられたようです。このようなことから、この付近が明治三〇（一八九七）年、第一次市域拡張によって大阪市に編入された後、「玉川町」（注3）という名前が誕生しました。

（注3）編入時は北区西成野田、明治三年に一部が西野田玉川町となる。大正一四年に此花区玉川町、昭和一八年の福島区誕生で福島区玉川町に、昭和五〇年の新住居表示の実施に伴い、区域変更して「玉川」となり現在に至る。

【野田川】

貞享元（一六八四）年、河村瑞賢の安治川開削工事によって、船津橋あたりで、南に蛇行し「古川」にはいり、ここで大きく北転し、「中津川」と合流して「伝法」から海に出ていた淀川本流の流れは主要流路でなくなりました。この安治川開削前の古い川筋を、地元では「野田川」と呼んでいたことが、江戸時代後期に書かれた「野田村」に関する古文書で確認できます。この消えた「野田川」は、「木津川千乗・野田川万乗」（注4）と言われ、豊かな漁場であったと書かれています。これとは別に、古くから現在の野田二丁目と三丁目の境に水路がありました。こちらも「聖天川」と同様に、江戸時代の地図にも描かれ、明治になっても水路が写真で残っています。その後埋められて、昭和の頃は「レンガ通」と呼ばれましたが、この川筋も「野田川」と呼ばれたことがあったようです。

（注4）「乗」は中国・周時代の兵車。動員できる兵車の数を例えに漁獲高の違いを表現している。

「記憶の地図」アートプロジェクト に参加して 西田康江

「中央卸売市場の近くにある、ひとつの住宅。約40年前に建てられ、まちの記憶を刻んできました。今回この建物が新しく改修される機会に、地域ぐるみでまちや暮らしの思い出をたどり、次世代に記憶をつなげるアートプロジェクトを開催します。」

この素敵な募集チラシを手にした時、ちょうど「野田村」の歴史や地図に思いを巡らしていたこともあり、その家をどのように利用し、どんな地図ができるのだろうと待ち遠しく思いました。

当日の二〇二三年三月一日（土）・二日（日）は晴天で暖かく、会場は角地で南・西の二つの道路に面した二つの入口が開放され、入りやすい雰囲気。一階床全面にモルタルで野田の道路地図が描かれ、写真は既成の壁やパネルではなく、二階床表しの天井から張りのあるグレーの帆布を二重に長く垂らし、両面にセピア色の思い出の数々を、見やすい間隔でピン留めされて楽しいギャラリーでした。

写真を提供されたり回覧板を見た方、研究室・社会人・学生の方、通りがかりの方も「何やってるの？」と会場に吸い込まれて、その数延べ二〇〇人。

主催は大阪公立大学大学院都市経営研究科アートとまちづくり研究会、共催は榊原節子建築研究所（注）・金崎亮太（アートコーディネート）。また福島区制八〇周年連動企画として区役所や野田町会

回覧板によるPR、写真集めに協力を得て一七〇枚も集まったと伺いました。思い出の写真を見ながら地域交流、世代交流の花があちこち

に見られ、大成功ではなかったでしょうか。貴重な写真の保存と、他の地域でも眠っている写真の発掘、展示方法、地域の応援等よい刺激を頂きました。

歴史研究会からは他に宮本会長、岡倉、末廣、西村、森畑各会員が参加しました。



注 榊原節子建築研究所

新しさ＝斬新さではなく、
見方や考え方を変えること
によって見出される「気づき」を大切に設計を
目ざす。福島区大開一丁目一
〇―四（大開本通り商店街）

会場風景



兵庫津ミュージアム見学と

周辺歴史散歩

澤田耕作

二〇二二年一月兵庫津ミュージアム（歴史博物館 兵庫区）がオープンしましたので二〇二三年五月一日（木）三名で行きました。阪神野田駅を正午過ぎ出発、阪神三宮駅から市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅で乗換えて、最寄りの駅の神戸中央市場駅前で降りました。

地下から上がるとイオン神戸南店（二〇一七年オープン 兵庫城跡・前神戸中央卸売市場跡）中央口に、マスコットの清盛君がお出迎え、正面から出ると道を挟んで向かい、白く横長の大きな神戸中央卸売市場（二〇一四年最終移転）、西に歩いて二〜三分で兵庫県立兵庫津ミュージアム（歴史博物館）に着きました。

ミュージアムは三階建て、一階は常設展示室、マップギャラリー、ひょうごシアター、ショップ等、二階が第一・第二企画展示室とライブラリー、三階は研修室二室となっています。

入場料は三〇〇円（七〇才以上は半額 別棟に初代兵庫県庁復元館見学料込）、常設展示室へ、何故神戸港が良好なのか映像と語りではじまり、奈良時代の僧行基ぎょうきのおわだのたまりの大輪田泊（鎌倉時代頃よりは兵庫津と呼ばれ、現在は神戸港）の修復から、平安末期の清盛の日宋貿易と平

家滅亡、室町時代の三代將軍足利義満の日明（勘合）貿易、戦国時代は三好長慶と豪商正直屋極井家との繋がり、信長の家臣池田恒興による花隈城落城と兵庫城の築城、豊臣政権直轄支配（文禄・慶長の役の出港地）、江戸時代は尼崎藩領地になり藩主は戸田家、青山家、松平家と移り、明和上知令（一七六九）で幕府の直轄領地となりました。そして幕末から明治維新の動乱期の関わりの資料・古写真・パネル・解説等の展示が時代に沿ってありました。

次は二階へ、この時は「日本遺産 銀の馬車道 鉱石の道」明延・神子畑・生野鉱山から姫路への道と歴史の展示がありました。

兵庫津ミュージアムの地は、江戸時代の地図（兵庫津略図 極井家所蔵）に依れば、町組織三方（岡方・北浜・南浜）の内 南浜地域の新在家町にあたり、大商人網屋新九郎邸の跡に建っています。網屋は岡山藩・高松藩の本陣でもありました。北浜・南浜の地域は西国大名が利用した本陣（浜本陣と呼ばれた）が多くあり、朝鮮通信使たちも宿泊しました。

ミュージアムを出て、阿弥陀寺、大輪田橋、清盛塚（供養塔・清盛像）等の兵庫・新川運河沿の史跡等を訪ね終えました。史跡の紹介は前号『会報 第十六号』 二三ページを見てください。

資料 「尼崎藩領時代の兵庫」 兵庫区役所 まちづくり推進部

近世大坂の基盤づくり

―大和川付け替えの歴史的背景

二〇二三年第一回セミナー報告―

服部静尚

日時 四月二十九日（土・祝）午後二時～四時
会場 福島区民センター三階

講師 岡本康敬氏（江戸歴史文化研究会代表）
参加者 四五十名

現在の大和川は、大阪市と堺市の境を西へ大阪湾に流れています。しかし元は、八尾市の南東辺りから北へ流れ、大川・安治川に繋がっていたことをご存知でしたか。関東の利根川が元は東京湾に流れていたことをご存知でしたか。今から三〇〇年以上も前、江戸時代にこれらの付け替え工事が行われた、その歴史背景や工事完成までの経緯を岡本氏のこの講演で知ることができました。

岡本氏は江戸時代の史料を間接的なものまで幅広く詳細に読み解き、次のように大和川付け替え工事が成就した経緯を説明されます。

（一）関ヶ原の合戦以降、戦乱の世から泰平の世となり、我が国では一七世紀の百年間で約二・五倍に人口増加する。これを支える経済基盤として、農地面積が二倍弱になるほど開発が行われた。その結果、大和川は天井川化され、山野荒廃し、二倍以上の頻度で洪水が起きた。

(二) このような中、幕府は「諸国山川掟」を制定し開発規制に動き出す。また泰平の世になって戦いに使っていたお金と技術を治水・溜池・用水路・干拓に投入し年貢をふやしてきたが、その後佐渡金山の産出量減少・一六五七年明暦の大火などがあって、幕府は慢性的な財政難に陥っていた。大和川付け替えについて、一六六〇年以降5度の幕府検分が行われたが、この財政事情もあって一六八四年代替策（下流の防災策）の安治川開削が行われた。

(三) しかしその後も、付け替えを望む大和川上流沿いの農民二七〇村の論理的・科学的な嘆願があつて、一七〇三年幕府は付け替えを決定した。その費用は、①貨幣の改鋳（慶長小判から金含有量の少ない元禄小判に）で財政立て直しし、②岸和田藩他四藩に普請を手伝わせ、③付け替えにより生まれる新田開発を鴻池ほか大坂商人に任せ、彼らの特許料等で幕府および各藩の工事資金をまかした。その結果、約八か月の短期間で大和川の付け替え工事が完成した。

急激な開発が災害を生み、それを経験して開発から自然との共存と社会意識が変わる。幕府の資金調達は、現在で言う経済対策三本の矢（①は金融緩和で市中に出回るお金を増やし、②は財政出動として公共事業でお金を使わせ、③は成長戦略として民間投資を誘導する）ではないか。岡本氏は、この三〇〇年以上前の出来事が現在に通ずると語られました。そして、この時代の農民の中には、階級を超えて論理的・科学的嘆願書を書ける者がいて、彼らは村を代表して動いたのでした。

私たちの時代認識も改められる素晴らしい講演でした。

田辺文学を生んだ〈福島〉

―福島区制八十周年記念講演会報告― 西田康江

日時 七月二三日（日）午前一〇時半～一二時一五分
会場 福島区役所六階会議室
講師 中 周子氏（大阪樟蔭女子大学名誉教授・
田辺聖子文学館館長）

参加者 田辺美奈氏（田辺聖子さんの姪）
一二〇名（女性八〇名 男性四〇名）

一部 講演 田辺文学を生んだ〈福島〉 中 周子氏
二部 対談 〈田辺聖子〉を語る 中 周子氏・田辺美奈氏

出版後半世紀を経た今も尚、大阪の本屋さん達がホンマに読んでほしい一冊「大阪ほんま本大賞特別賞」に選ばれるなど、日本中の多くの人に愛され続ける作家・田辺聖子さん。

講演ではふるさと福島への思い、幅広く多彩な田辺文学の魅力、女流作家さんへの応援、対談では聖子さんの素顔や、最近発見された日記などについて大変興味深いお話を楽しく語って頂き、皆様の関心が高まると共に、私たちの願う「田辺聖子生誕・文学記念碑（仮称）」に向かって一歩前進できましたことを心より感謝申し上げます。

講演会の内容

● 田辺聖子という作家を語る時に二つの視点がある。一つは大阪の作家だというイメージが非常に強いこと。もう一つは芥川賞作家であ

り、受賞後もスランプなく書き続け、文化勲章受章にも至った。最後まで作家でいられることは大変珍しく、大きな事を成し遂げられた作家であるということ。

●ご本人が紫綬褒章や文化勲章賞を受賞していることはよく知られているが、昭和六二年に直木賞初の女性選考委員となり、その後女性作家が多く受賞するようになった。今活躍する女性作家の多くが田辺聖子さんに褒めてもらって作家になりました、と報告される。

●地元であまり顕彰されていなかった与謝野晶子など多くの女性作家を見出し、日本文学界の飛躍に大きく貢献された偉大な作家であった。

●中館長より『田辺聖子の世界展』（二〇〇六年に全国で開かれた展示のカタログ 九一頁）を多数寄贈頂き、抽選により参加者にプレゼントして大変喜ばれた。

●参加者の感想より

・地元で生まれ育ったけれど改めて福島の良いところを教えて頂き、より地元愛が深まった。

・子供の頃から文才があったことを知った。日記はかたい文章で書かれていた。

・少女が体験した戦争のすさまじさをその翌日に鮮明に記録したことに驚いた。その記録がよく残り発見されたことに感動した。

・本を読んでみたくなった。

・頂いた本をすぐ友達にも見せた。

・田辺聖子記念館に行ってみた。

【特別寄稿】

田辺文学を生んだ〈福島〉

―福島区制八十周年記念講演会― 中 周子

二〇二三年に福島区が区制八十周年を迎えた。長い歴史を持つ福島の地で生まれ育った人々はどれだけの数にのぼるのか想像もつかないのだが、その中の一人に昭和平成を代表する作家として文化勲章を受章した田辺聖子がいる。

田辺聖子は昭和三年に福島で生まれ、昭和二十年の大阪大空襲で生家が焼失するまで多感な十代を福島で暮らした。多くの作品やエッセイに福島を描いている。ことに「折り目正しい暮らし方」と「人生を楽しむ」という生き方を福島で学んだと書いている。福島は田辺聖子の人生と文学の根幹に深く関わる土地なのである。

近年、福島時代に書かれた「日記」が発見され、『田辺聖子 十八歳の日の記録』として文藝春秋より出版された。まだ無名であった一少女の日記ながら、戦中戦後の激動の時代と人間を完成度の高い文体により描いた文学作品として注目されている。「日記」の出現によって、福島と田辺文学との関りはさらに研究されるべき時を迎えたと言えるよう。

講演後には様々な質問を頂き、生誕地での講演会ならではの田辺文学への関心の高さが窺われた。その中に田辺作品の題名『道頓堀の雨に別れて以来なり』についての質問があった。講演内容とは無関係だったので詳しく説明できず、事後に質問者には補足説明したが、会報

でも補足しておきたいと思う。

質問者によれば『道頓堀』の題名は岸本水府の川柳であるから「とんぼり」と読むはずだとの説があるらしい。確かに、川柳の初句は五音が普通であるし、「道頓堀」は「とんぼり」とも言う。しかし、川柳に（短歌、俳句も同様だが）字余りや字足らずの句は多くある。同じ作品中には

道頓堀帰るに惜しい時間なり

という川柳も引かれているが、この初句はどう読んでも五音にはならない。「とんぼり」では調子が悪い。「どうとんぼり」と読んだ方が落ち着くし、そう読むに違いない。

水府の川柳を「とんぼり」と読んだと言うためには、仮名書きの水府自筆資料の発見が必要である。ただし、仮に見つけたとしても、題名は「どうとんぼり」と読むのが正しい。なぜなら初版本の題名に「どうとんぼり」とルビが振ってあり、担当編集者によれば田辺聖子自身がつけたルビだからである。

田辺作品には同様の発想による題名、杉田久女の俳句を用いた『花衣ぬぐやまつわる……我が愛の杉田久女』がある。この題名のもとになった俳句は作品中では

花衣ぬぐやまつはる紐いろく

と書かれている。久女の句は「まつはる」と旧仮名遣い（因みに、

作中の久女の俳句はすべて旧仮名）だが、題名は「まつわる」と新仮名遣いである。俳句や川柳の作品であっても、小説の題名は作家の手になるものと考えられる。

その後も様々な質問や感想を頂いている。講演をきっかけに田辺文学への興味が広がってゆくのは嬉しいことである。

今回の講演会を企画され、色々とお世話下さった福島区歴史研究会の皆様へ深く感謝申し上げます。

（大阪樟蔭女子大学名誉教授・田辺聖子文学館館長）



『会報』十三・十五・十六号に田辺聖子関連の記事があります。

スクリーン前 左が中氏 右が田辺氏



2023年の事業

『福島区歴史研究会会報 第16号』発行2月

あいあいまつり 2.11 展示など

展示「福島区ゆかりの文学者」 ～3.31 会場・福島区役所

展示「福島区80年のあゆみ」3.14～6.30 会場・福島図書館

展示「地図に見る福島区」4.10～9.29 会場・福島区役所

セミナー「近世大阪の基盤づくり」4.29 講師・岡本康 会場・福島区民センター

展示「福島区の学校」7.11～10.18 会場・福島図書館

講演会「田辺文学を生んだ〈福島〉」7.23 講師 中周子氏・田辺美奈氏

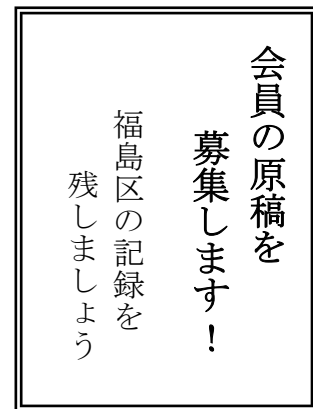
会場・福島区役所

福島区民まつり 10.7 展示・クイズなど 会場・下福島公園

展示「福島区80年のあゆみ」10.16～2024.3.29 会場・福島区役所

2023年の活動記録

- 1.19 企画会議
- 2.16 役員会
- 2.26 総会・懇親会
- 3.4 三好長慶公武者行列に「福島区 野田・福島城隊」で参加
- 3.10 展示作業（図書館）
- 3.16 企画会議
- 3.18 伊丹市立図書館の講演会「田辺聖子の愛した伊丹ことば蔵」に参加（講師中周子氏）
- 4.6 展示替え（区役所）
- 4.20 企画会議
- 5.11 町歩き（兵庫区ミュージアムなど）
- 5.18 企画会議
- 6.15 企画会議
- 7.7 展示替え（図書館）
- 7.14 展示替え（区役所）
- 7.20 企画会議
- 9.21 企画会議
- 9.26 福島区女性会「福島区の歴史」に講師派遣
- 10.13 展示替え（区役所）
- 10.19 展示撤去（図書館）
- 10.19 企画会議
- 10.21 福島地区ふれあい祭り（福島小学校）展示
- 10.23 ラジオ大阪OBC「原田年晴かぶりつきマンデー」出演（11.13放送）
- 11.16 企画会議
- 11.25 福島区未来わがまち会議・福島区主催「ふくしま魅力探検町歩き」で案内
- 12.21 企画会議
- その他 野田村ガイドブック作成委員会・鷺洲村ガイドブック作成委員会などの活動
- 浦江塾〔協力〕2.4 3.4
- 福っくらトーク〔協力〕5.6 6.3 7.1 9.2 10.7 11.4 12.2



ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>

(会報バックナンバーも掲載)

(印刷：谷口印刷紙業)